

# ジョナサン・ターナーによる社会学理論の 社会学の実践における利用の提案（編集）

編集兼翻訳 久 慈 利 武

はじめに

ジョナサン・ターナーは1942年生まれ、1965年にカリフォルニア大学サンタバーバラ校から芸術学士号 (Bachelor of Art degree)、1968年にコーネル大学から博士号を取得している。1969年よりカリフォルニア大学リバーサイド校教授、1999年論文記載の肩書きで同大学同校傑出教授となっている。31冊の著書を著している。処女作は『アメリカ社会』（1972年）でアメリカ社会の社会問題、人種問題（不平等、貧困、階層）に関心を持っていた。その一方で古典、現代の学者の社会学理論を自身の命題スキームにまとめることにも関心を持ち、『社会学理論の構造』（1974年）で現代の学者の理論、『社会学理論の発生』（1981年）で社会学古典理論を命題にまとめている。前者は機能主義、紛争理論、交換理論、象徴的相互行為理論から次々に新しい理論を追加して2002年に第7版の改訂、後者はコント、スペンサー、デュルケム、ウェーバー、ジンメル、ミードの理論に始まり、やはり2002年に第5版と改訂を重ねている。彼の手法は、学説研究というよりは、自己の表現形式に、各学者の学説を理論命題として整理するもので、それにより、学者間の比較、いくつかの学説の折衷をはかることも可能となる。彼は当初は理論のフォーマル化、メタ理論化と表現していたが、ある時期から知識の累積化、科学理論化と称するようになる。

1980年代後半になって、彼は長年の一般理論への関心を、知識の累積、実用的な知識の探求へと集約し、個人の感情、動機づけ、相互行為（ミクロ水準）、組織（メゾ水準）、制度（マクロ水準）に関する成果を発表するようになる。このことについては、Powersによる辞書の記述を参照されたい。

1990年にステファン・ターナーと共同で著した著書で、アメリカ社会学の発展と衰退の歴史をふり返り、80年代以降現在に至る衰退（社会学部の大幅な減少、再編、社会学学士、修士、博士号獲得者の大幅な減少、社会学開講数の大幅減少）をASAの新しい部会設立要件の緩和による部会の簇生、社会学内部の不統合に求めている。私は、60年代の社会学の隆盛は、スプートニク（人工衛星）科学でのアンバランスを是正するための社会科学研究への研究資金の投入（ジョンソンによる貧困との戦争、人種間の階層格差の是正政策に資する

社会科学研究への期待)が、失望に変わったこと、80年代のリーガンによる社会科学研究資金の大幅引き締め、という外部要因の方が大きく関わっていると思うが、ターナーは社会学の学問内部の要因を重視する。

1995年に、1992年から3年間期限付きで *Sociological Practice* 誌を刊行していた ASA の社会学実践部会の刊行打ち切り、2000年にワシントンで応用社会学会と臨床社会学会(当時社会学実践学会の呼称)の5年後の統一を目指す集會が開かれていること(2005年に *the Association for Applied and Clinical Sociology* として発足)が関係したのか、ターナーは、カリフォルニア社会学会の基調講演(1998年)で、社会調査研究の現状と社会学理論研究の現状の問題点を憂い、社会学理論と調査と(社会問題解決への)応用の連結を提唱する。社会調査者が計量分析による相関、因果分析に終始して、理論を志向しないこと、社会学理論家のたこつぼ化によるパラダイム割拠、イデオロギー批判による他学説への攻撃、英雄崇拜、社会学史研究への安住を批判し、その状況を打破するために、社会学理論の知識の累積、古典・現代理論家の学説の理論的原理への集約、理論的原理の親指ルールへの翻訳、親指ルールに翻訳された社会学の知見の臨床社会学者、応用社会学者を通じてのクライアントへの工学的応用の提供を提案する。社会学理論の知識の累積は、種々の古典・現代理論家の学説から抽出した理論的原理を彼固有のやりかたで集約する手法であるが『社会学理論の構造』で第4版(1986年)では、「理論の考え」を扱う序章、第5版(1991年)で「理論的综合」を扱う終章をおいている。

パワーズ執筆辞典の人名項目「ジョナサン・ターナー」では、ターナーによる社会学理論の社会学の実践における利用の提案はまったく触れられていない。この提案は応用社会学者、臨床社会学者などの社会的実践者を除いては、特に理論社会学者には賛同者は少ないようである。

そこで、ジョナサン・ターナーによる提案を、ターナーの1998、2001、2008年の3本の論文から、編集者が適宜抜粋して、1本の論文に編集し直したものである。このようにすることによって、彼の主張が広く理解されるものと判断したからである。しかし論文の推敲に十分な時間をとれなかったので、重複があることも否めない。ターナーの1998年の論文との出会いはまったく偶然であった。私が本学に赴任して2年目から同志と開催している応用社会学研究会で読んで紹介する論文を探していて、図書館書庫で雑誌のバックナンバーのコーナーでチャレンジングな題が偶然目に留まったものである。それ以前に、ターナーの名は新陸人・三沢謙一編『現代アメリカの社会学理論』(恒星社厚生閣刊)で交換理論を執筆した際に、1974年の『社会学理論の構造』を参照し、記憶していた。この論文を応用社会学研究会の顧問で東北大学名誉教授の斉藤吉雄先生は、痛く感心され、翻訳を私に督励され

たことを付記します。

出典は下記の通りである。

0. ジョナサン・ターナーの研究関心

Ritzer, G (ed.) 2005 *Encyclopedia of Social Theory* 所収 Charles Powers 執筆項目 Jonathan H.Turner (pp. 850~851.)

1. 社会学理論と社会的実践はかくもかけはなれねばならないのか？

Jonathan H.Turner 1998 *Sociological Perspectives* 41 (2) 所載 (1996年11月カリフォルニア社会学会基調講演) の抜粋 (pp. 243~244, 246~250, 253~256.)

2. 社会学は聞こえるほど実際に好ましくないものか？

Jonathan H.Turner 2001 *Sociological Practice: A Journal of Clinical and Applied Sociology* 3 (2) 所載の一部 (pp. 99~101, 107~109, 117~119.)

3. 工学原理をどうやって開発するかの例証

Jonathan H. Turner 2001 *Sociological Practice: A Journal of Clinical and Applied Sociology* 3 (2) の所載の一部 (pp. 109~117, 119~120.)

4. 社会的実践における社会学理論の利用のために (題は編集者が考案した)

Jonathan H.Turner 2008 *Sociological Focus* 41 (4) (中央北部社会学会 2008年全会員向け講演会) の抜粋 (pp. 281~283, 291~299.)

0. ジョナサン・ターナーの研究関心

35年にわたって、Jonathan H. Turnerは、社会学理論の実証主義的見地を提唱し、社会学の目標は、究極的にはいつの時代もどこの場所にも働く(彼のいうゲネリックな)基礎的社会的諸力を説明する抽象原理と分析モデルの産出であると述べている。多年にわたり、ターナーはメタ理論的分析に従事し、古典的諸理論(パラダイム)と現代の諸理論(パラダイム)を諸命題とモデルに公式化してきた。これらの努力の目標は、古典的理論家が社会的宇宙の運行力学を説明することに科学的に貢献していること(Turner/Beeghley/Powers 2002)と今日の理論の一部は科学的理論としてベターであることに照射することにあった。この提唱とメタ理論化が産出されるにつれて、ターナーは科学的理論のための彼の戦略を実行に移し始めた。この戦略は、理論が所与のトピックに関して何を語らなければならなかったかを知るために、既存の理論を公式化することと、これらの理論から有用な要素を抽出することと、もっと堅固な理論を産出するために新しい要素を付加することからなっている。概略をいう

と、ターナーは、社会的宇宙のなかの諸力の（直接、間接、逆）因果性に照射しながら、社会的諸力の因果的フローを可視的な空間に示す抽象モデルを産出した。これらのモデルと並んで、ターナーはまた社会的宇宙のなかの諸力間の基本的関係を述べる抽象命題のリストを産出しようとした。これらの諸理論産出のねらいは、概念を明確に定義し、概念間のお互いの関係の性質を正確に特定し、各概念の価値を変える条件をリストすることにあった。

かくして、ターナーの仕事は、多様な思想の糸を一緒にまとめ、必要な修正や追加を施し、原則として検証されうるようにフォーマルな仕方で理論を提示する、総合的なものである。初期の仕事はエスニック関係の文脈での紛争過程をめぐって回転した（Turner 1973, Turner/Singleton 1978）。これらの仕事はいくつかの次元（権力、物質的富、威信の不均等な分布、同質的な下位人口集団の形成・ランクづけ、下位人口集団を横断しての移動）に沿って階層を概念化する社会階層の一般理論（1984）の一部になった。これらの諸次元の各々に関して、数理的に述べられた公式法則が定式化された。

1980年代末に、ターナーは既存理論を、動機づけ、相互行為、構造過程に関する一連の分析モデルに総合しようとした社会的相互行為の理論（Turner 1987）を産出した。動機づけ過程は、行為者に行為するエネルギーを注ぐ過程であり、相互行為過程は、対面的に接触する人々の相互の合図と解釈の過程であり、構造過程は時間空間で相互行為のフローを安定化する力学である。10年の後に、ターナーは相互行為の新しい理論を産出し、これは以前の理論のアイデアのいくつかを取り込み、彼が1990年代と21世紀にさしかかる間に開発した情動の力学に関するアイデア（Turner 2000a, 2002）を付加したものである。この新しい理論は、もっとマクロな社会過程に関する仕事（Turner 1995）のなかで開発した概念図式を採用し、この単純な概念編纂はターナーの目下の理論化のすべてに影響を及ぼしている。このスキームは社会的宇宙はミクロ、メゾ、マクロの3水準で開花すると述べる。これらは分析的区別以上のものである。ターナーの見解では、それらは実在である。実在の各々の水準でその水準にある構造の形成と働きを駆動する諸力が存在する。ミクロ水準では、キイになる構造は出会いである。メゾ水準では、これに特有の構造は、（目標を達成するために組織された分業を持つ）コーポレート・ユニットと（人々を互いから区別する）範疇的ユニットである。マクロ水準では、ユニットは制度システムである。各ユニットは、人間の生物学の中に及び他のユニットに埋め込まれている。かくして、制度はコーポレート・ユニットと範疇的ユニットからなり、コーポレート・ユニットと範疇的ユニットは出会いからなり、出会いは人間の生物学的メークアップのおかげで可能である。しかし、ミクロとマクロをつなごうとする多くの理論と対照的に、ターナーは各水準の実在はそれ自身に固有の力によって駆動し、これらの力は理論的諸原理の主題である（Turner 2002）。つまり、社会学理論の目

標は、各水準の社会的実在を駆動する諸力を摘出し、各々の諸力に関して、理論家はそのダイナミックな特性に関する抽象的原理を述べることができるべきであり、もし望むなら、各諸力の価値とバレンス (valence) に影響する社会界の特性間の因果連関を描写する分析モデルを開発することである。

ミクロな社会過程に関する最近の著作 (2000a, 2002) でターナーは出会いを駆動する6つの力を特定している。情動、交渉のニーズ、シンボル、役割、地位、人口統計学的・生態学的特性。1990年代に早くも、ターナーは制度システムの形成を駆動する諸力を説明しようとするマクロ力学の理論を開発した (Turner 1995)。この著作で、彼はマクロ水準にある社会的宇宙を駆動する7つの力が存在すると想定した。人口、生産、分配、権力、空間、分化、不統合。ターナーはまだメゾ水準の力学についての理論を仕上げていない。

上記の一般理論のスキームは開発途上にあるが、ターナーは人間生物学と進化にも探求を進め、社会学者は社会的宇宙を完全に理解するために、生物学的プロセスを概念化しなければならないと述べる。この進化的理論化の大半は彼らが人間の原祖先に与える手がかりを見るために、類人猿の分析に取り組む。ターナーは人間性の再分析 (Maryanski/Turner 1992) から人間の情動の進化に関する理論 (Turner 2000) まで多数の著作を産している。同時に、ターナーは淘汰のプロセスの理論、制度システム発展のマクロ力学の原理を検討することによって、段階モデルを復活させ、修正しようとしている (Turner 2003)。こんな風に、ターナーは、社会の進化のこれまでの理論の明白な欠陥を克服しようとしている。

ジョナサン・ターナーは社会学の数少ないグランド理論家の一人である。

## 文 献

- Maryanski, A./H. Turner 1992 *The Social Cage: Human Nature and the Evolution of Society*. Stanford, CA: Stanford Univ. Press. 正岡寛司監訳『社会という檻：人間性と社会進化』明石書店 (2009)
- Turner, J.H. 1972 *American Society: Problems of Structure*. New York: Harper and Row.
- 1977 *Social Problems in America*. New York: Harper and Row.
- 1984 *Societal Stratification: A Theoretical Analysis*. New York: Columbia Univ. Press
- 1987 “Toward a Sociological Theory of Motivation.” *American Sociological Review* 52: 15-25.
- 1991 “Developing Cumulative and Practical Knowledge through Metatheorizing.” *Sociological Perspectives*. 34: 249-68.
- 1995 *Macrodynamics: Toward a Theory on the Organization of Human Populations*. New Brunswick, NJ: Rutgers Univ. Press for Rose Monograph.
- 1999 “Toward a General Sociological Theory of Emotion.” *Journal for the Theory of Social Behavior* 29: 133-162.

- 2000 *On the Origins of Human Emotions*. Stanford, CA : Stanford Univ. Press. 正岡寛司訳『感情の起源：自律と連帯の緊張関係』明石書店（2007）
- 2000a “A Theory of Embedded Encounters.” *Advances in Group Processes* 17 : 285-322.
- 2002 *Face-to-Face: Toward a Sociological Theory of Interpersonal Behavior*. Stanford, CA : Stanford Univ. Press. 正岡寛司氏らによる訳書出版予定あり
- 2003 *Human Institutions: A Theory of Societal Evolution*. Boulder, CO : Rawman & Littlefield.
- 2009 *Human Evolution: A Sociological Theory*. London : Routledge.
- Turner, J.H./C. Starnes 1976 *Inequality: Privilege and Poverty in America*. Santa Monica, CA : Goodyear Publishing.
- Turner, J.H./D. Musick 1985 *American Dilemmas. A Sociological Interpretation of Enduring Social Issues*. New York : Columbia Univ. Press.
- Turner, J.H./J.E. Stets 2005 *The Sociology of Emotions*. Cambridge University Press. 正岡寛司氏による訳書出版予定あり

## 1. 社会学理論と社会学的実践はかくもかけはなれねばならないのか？

【梗概】社会学理論と実世界の問題へのその適用は、社会学のコアを構成すべきことが論じられる。だが、社会学的実践の発想は、社会学理論と調査のより厳格な適用に傾いて、工学的適用は放棄されている。社会学は、その実践を、抽象的な理論原理が親指ルールに煮詰められ、社会構造を建設ないし解体するために用いられる工学を作り出すように定義し直し、定位し直すべきである。工学への定位を採用することによって、社会学的理論と調査はもっと注目され、役立つことであろう。

### 1.0 序論

大半の社会学者は人々に関心があり、ヒューマニティに配慮したために社会学に入った。程度に違いがあれ、我々のほとんど全員は人々を助けたい、世界をもっと良くしたいと欲している。計量的方法論者になりたいとか、新しい方法論と最新の統計技法を開発し利用する調査者になりたいと望むものはごくわずかである。また我々は社会的宇宙の働きに関する抽象モデルと理論を結実する理論家になるために社会学に入ったのではない。平均的な社会学専攻者に彼らの抱負を尋ねると、彼らが社会学を継続するなら、我々が彼らに強いること、——つまり計量的方法論を習得し、古典理論を研究し、プログラムに応じて様々なジャンルの今日の理論を習得すること——をやりたいと述べる者はめったにいないだろう。もちろん、この強調の間違ったところは何もない。なぜなら、いかなる学問もその理論と方法論によって駆動され、形成されるべきだから。しかし、大学院課程ではそれ以上のことが起こっている。まず社会学に我々に興味を抱かせる衝動——世界の問題に役立つ何かを貢献したいという願望——が失われ、方法と理論のコース（講義）によってわれわれからたたき出されてい

る。その上、我々が社会問題への関心を保持するなら、主流社会学から自分を切り離し防衛するために、——マルキスト、フェミニスト、ポストモダニスト、その他のラディカルな見地——のイデオログとならなければならない。かくして、今日では多くの通常社会学は学部生として当初社会学に惹かれたものとの関係を持たず、これらの衝動が保持されている場合には、社会学のイデオロギー的フリンジに押しやられている。いずれのケースでも、社会学的実践は分離され、様々な宇宙の中を動き、白昼にお互いを通過させている。

本稿では、社会学の分裂、特に科学的理論と実践の断絶、を検討し、途方もない解決策に見えるもの（社会学に工学的翼の創出）を提案したいと思っている。工学という語を選んだのは、一部にはそのショッキング的価値のためでもあるが、それ以上に念頭にあったのは、理論的諸原理を実世界に適用することによって、社会学を公共の討論の場に連れ戻すためである。工学の性質は社会界の建築物を形成することを選ぶものも含まれる。

### 1.1 方法論と理論教示の儀礼化：大いなる退屈

#### 略

確かに、私は事例を過度に述べすぎているが、私が述べたことの中には真理のかなりの部分が含まれている。結局、理論と方法のこの儀礼化された教示、データ収集するときや理論を定式化するときの理論と方法の分離は、わたしが社会学における精神的規律の欠如と呼ぶものを創り出している。我々の理論は、経験的調査、内部の論理、世界を良くする効用によって規律されていない。我々の方法論は、理論的真空の中で経験的世界のある側面を記述するために使用されている。我々の理論は哲学の雲の中に拡散し、ひとつのジャンルにますますなり、問題状況を変革するために理論を使用したいと思っている者を離れさせている。我々の調査活動は、知見が雑誌に掲載されるようにコンピュータを経由したデータ収集の方向に進んでいる。

率直に言って、上記の理論化と調査への儀礼化し生産的でない従事の仕方が、社会学を（我々学界にいる同僚ではなく）実世界にいる一部の人々に非常につまらないものに見えさせている。社会学に対するこの偏見は多くの場合十分に値するように私は思うのだが、世界が人類が直面する多くの組織問題を解決するのを助ける人間組織についての科学を必要としているだけに、大きな悲劇でもある。

この最後の指摘をとりあげ、理論と調査をつなぐ努力の欠如と並んで、理論と調査の教示の儀礼化という本稿のテーマを照射するならば、社会学的実践を社会学の周縁に押しやることにする。それはいくつかの意味でそうしている。社会学的実践は少なくとも社会学という専門職の中では、威信が低い仕事である。従って、俸給が低い仕事である。社会学的実践は、

ほとんど必ずといって良いくらい、脱理論的でも理論の代わりに、調査者の政治的、個人的イデオロギーを代置し、理論には何も寄与しないし人間的状態をたいして改善しない (e.g. Lee 1976)。社会学的実践は、学界の外で遂行される傾向があり、社会学的実践に属する研究者をお互いからと、社会学全体から仕切ってしまうている。心理学が能力を認証するための重要なメカニズムの多くの部分を支配しているので、しばしば不法な（合法的でない）ものとみなされる。かくして、我々が応用社会学、臨床社会学、社会学的実践のいずれの名称を選ぼうと、実世界を取り扱い、他者を助ける学生や学者の初期の衝動を留めるものの業務に励む社会学の翼は、プログラム評価、社会的インパクトリサーチ、ニーズ査定、犯罪司法、保健、家族、コミュニティ・オーガニゼーションのような関連領域での仲介の折衷となる。社会学的実践は、次第にデータ収集方法の料理本に依拠し、そうなるにつれて学生の訓練においてあるタイプの計量的方法を過剰に重視することを制度化し、それはますます、実生活問題の研究を長らく哲学の雲の中に退却したり、自分たちの感情を慰めるイデオロギーの人形を抱く理論家から分離する。

## 1.2 社会学の工学を目指して：なぜこれが途方もないものに見えるか？

理論が哲学や道徳的非難の領域に退却することは大きな悲劇であり、この退却が社会学の研究を社会学の説明努力から分離するかぎり、二重の悲劇である。理論と調査の断絶はたくさんの非常に重要な帰結をもたらしている。

第一に、理論に精通した調査と我々の実践の試みの分離は社会学が尊敬と声を獲得するのを邪魔している。世界が直面するほとんどあらゆる主要問題は、社会組織をめぐる廻っている。社会学は社会組織の科学である（はず）なのに、組織の問題の研究に専念する学問自体が政策形成者のテーブルに招かれることはめったにない。この仕事はエレガントであるがシンプルな理論をもつ経済学者のところに行く。あるいは、いくつかの理論を持つが、もっと重要なことに資格証明認定化の芝生 (the credentialing turf) の多くを支配することに由来する一日の長を持つ心理学者のところに行く。経済学も心理学も文化と社会組織を本当に把握していない。彼らが牛耳っているのは、社会学者がフォーマル理論を産出できず、これらの理論と調査を連結できず、社会学的実践を行うときに、イデオロギーによる非難を抑制できないからである。おそらくこの種のみなを幸せにしたり、道徳的に純粹にするが、世界の問題について非常に多くのことをする我々の無力ぶりを約束するだけである。

第二に、理論と方法と実践の断絶は社会学を累積科学となることを妨げている。実は、大半の社会学者は社会学が、この信念によって支配されている世界で、我々を一層周縁に追いや、我々を人文学に追いや、科学であるべきだと信じてはいないだろう。しかしもっと

重要なことには、社会学が累積科学になり得ないなら、社会学は世界に本当の影響を持ち得ない。意味を持つことができる学問はテストされ、現実生活の問題に利用される理論を持っている。一言で言えば、それは工学的応用を持っている。工学の実践家の多くは自らを工学技士と見なしている。その上、工学的応用を持つ学問は、これらの応用が理論の効用をテストし、しばしば理論に修正と順応を強いるから、一層累積的となりうる。理論と工学的応用を分離する社会学のような学問は、知識生産の最大の源泉のひとつを失う。その代わり、多くの社会的実践は一部の現象を描写するだけで、このリサーチにもっと抽象的な声明が含まれている場合も、リサーチ知見によって変更し得ない自己確信的イデオロギーである。

第三に、理論と方法と実践の断絶は、社会学の中の経験的な仕事の多くを本質的に人口統計学的、国勢調査的、その他のもっと記述的の任務を持ったサーベイ・リサーチに還元する。記述的統計学はあらゆる種類の根拠のために必要であるから、もちろん重要である。しかし、サーベイ・リサーチに力点を置くことは、社会的実践を質的な方法から切り離す。それはまたすべての調査を理論から切り離す。実際、サーベイ・リサーチは実際の行動を把握せず、人々が行動についてどう考えているかしか把握しないので、また構造を分析できず、構造の近似物として利用される回答の集計の指標だけを分析するので、歴史とプロセスを分析できず、媒介する因果過程を隠す横断による分析しかできないので、理論が定式化される仕方と両立しうる仕方で現象に到達できないので、理論を検証するには最も役立つ方法であろう。再び、時には、数、態度、感情、社会経済的位置等を数えることは有用であるだけでなく、重要でもある。これらは、構造、過程、コンテキスト、相関係数に容易に転換され得ない他の動的な力を検討する調査と理論の代用物とはなり得ない。

この真の、幾分誇張された、論争的な批判を行う私の大きなポイントは、理論と方法の分裂は、社会的実践に携わる人々が工学の精神を開発するのを妨げることである。社会的実践に携わる人々がそのような精神を持たないなら、また工学の名称に憤るなら、社会学全体が自らを社会工学ができると思わないであろう。人が私が提唱していることを無視する前に、工学が実際にはどんなものかレビューすることにしたい。

そのコアにおいて、工学は理論的原理の利用であり、それは構造をどのように組み立てるか、構造の抱える問題をどのように判定するかに関する親指ルールにしばしば解体されるものである。暗い（わびしい）、無感覚という評判にも拘わらず、工学士は実際にはものの組み立て者である。彼らはプランを練り、コストをはかり、どのように進めるかプランを立てるのを助ける。彼らは潜在的な問題点を指摘する。

ではなぜよりよい世界の構築を夢想することから出発した社会学者が「社会工学」のラベルに尻込みするのか。ひとつには、左翼右翼双方の私の知る大半のイデオロギー的社会的学者

は、彼らの道徳的主義の名の下に我々にビッグブラザーズたらんとしているものの、社会学はオーウェルのビッグブラザーズのイメージを内包しているからである。実際大半のイデオロギー的な社会学者は、たとえ彼らがその中で仕事をしている象牙の塔を実際に離れたがっているとしても、何かを建設するための知識と精神的規律 (mental discipline) を欠いた机上の工学士である。第二の理由は、あなたが理論的原理を開発し、テストと経験に基づいてこれらの原理を有用な親指ルールに翻訳 (変換) し、それらを何かを組み立てるのに利用することに従事しなければならないからである。このように表現すると、社会学者はすぐに当惑する。なぜなら、我々は自分のイデオロギーと両立しがたいプロジェクト、プランを示唆する親指ルールに翻訳される公認の原理を一切持っていないから\*。第三の理由は、工学的応用の周りに組み立てられた学問は、社会学者が自分独自のことを行うことを邪魔するからである。それは彼らに原理、応用の観点から彼らの思考と行動を律することを強いる。またそれは彼らに、自身の個人的ないし政治的イデオロギーを彼らの仕事から分離するように鼓舞する。社会学者は、集団イデオロギーへの攻撃的非難にも拘わらず、事実、原理、親指ルールに制約されないで自分の流儀で物事を進めたがる粗野な個人主義者の一族であるから、上記のことを最も躊躇するのである。

\*社会学の理論家は人間組織のたくさんの法則を発見してきているが、これらの原理の語彙、編纂に同意することができない。必要な知識を持っているが体系化できないことが社会学における理論化の大きな過失を代表している。

精神的規律 (mental discipline) を自分に課すことに気が進まないのは、我々が「社会学」の代わりに「社会学実践」の名称を使う理由である。この名称は厳密さの気味がなく、我々が癒しに従事する臨床家かそれともそれほどソフトではないがまだうまく定義されていない何かかどうかというイシューを混同している。この名称は非常に曖昧で、包括的なので、誰もが属することができる。工学士 (技師)、医師、心理学者が持つような実践に対する資格証明 (credentials) を誰一人持つ必要がない。この名称は、アメリカ社会学会にさもなければマージナルな社会学者をその多額な会費のテントに補充することを可能にしている。この名称は社会学者が自分を標準的な知識体系を獲得し、社会の働きを説明する一般的理論原理を学習し、それらが個別の問題に適用される仕方を学習し、それらが間違っている場合に倒壊するものを組み立てるのにこの原理を使用する義務を持つと見なすことを絶対に邪魔する。

しかし、社会学者が依然よりよい世界を建設したいと欲している限り、彼らは自分を社会工学士と見なし始めた方がよい。もし我々がアドバイスを与え、耳を傾けられたいと思うなら、我々は編纂された知識を持つことに由来する尊敬を獲得しなければならない。首尾一貫

した理論，検証されたりサーチ知見，倒壊しない何かを組み立てることにこれまでに成功したことがなければ，学問の助言は耳を貸されないであろう。経済学者の事例はこれを如実に物語っている。というのは，それは，すべての知的な活動を組織する（たとえ間違っている）理論を持つ力を示しているから。アメリカの経済学は，ひとつの間違った理論，少なくとも非常に限定された理論を持っている。だが彼らは我々のものであるべき政策決定を牛耳っている。これがそうなりうるのはいかにしてか。理由の一部は，彼らの理論が資本主義社会のイデオロギーを擁護することにあるが，そのほかにもある。彼らは首尾一貫した，自信に満ちた，（たとえ間違ったものであっても）予測を行うのに理論と親指ルールを使用することができる，何かをするのにどのようにすべきかを述べるからである。同じことを社会学者はできるか？ 回答は当惑しながらも明白である。我々は実際の権力を持つ，資源を持つだけひとりとしてそれに多くの注目を払うものがないイデオロギーを非難する時を除いて，できないのである。

すべての有力な諸科学は工学的応用を持っている。その上，この応用はしばしば大きな試金石となる。それは学問のコア知識の有用性を証明する。もし社会学者が工学士のように思考することすら拒絶するなら，我々は権力を持たないし，現代の重要な問題に対して影響力を発揮できないし，我々がしばしば脆い土台の上にいる学界の外に何かとなることは決してできない。我々が応用の仕事で工学士と自称することを拒絶するなら，我々は自らを弱体化し，尊敬を失い，認証されない素人（uncredentialed amateur）として登場する。我々が大学院に進み，理論と調査の訓練のナンバーを振った儀式に耐える前のすべての年数である学部卒として我々の職業で食べてゆけない。我々は社会学の潜在能力を破壊し，自らを工学士と見なす気もなく，できもしない，credentialsの公認の傘なしに働かねばならない我々の実践者を周辺化に甘んじさせる。

1984年に，ASAの理事会はもう一度社会学者の資格認証を探求したが，1995年にその努力は放棄された。それが放棄された理由は，私の考えるところでは，ASA（社会学的実践部会の正会員）は自らが望んだことであつたからだ。しかし，もっと多くのことが絡んでいた。ASAが社会学者の資格認定を可能とするために一体何ができるのか。その土地は，プランニング，カウンセリング，組織経営活動を認証する心理学，その他によって既に耕されているのである。あまりに遅すぎた。だが二つのグループは引き続き社会学者を認証する努力を続けてきていた。現在では，SPAとSASから代表を送る委員会を含む第3の努力が存在する。

これらの努力に伴う問題点に関する電子メールのやりとりの中で，Michael Fleischerは，州レベルと郡レベルで内部認証に強い賛成の意向を語っている。「学部の閉鎖性，合併，教員の先細りに明らかなる学界における我々の心許ない地位と実践の分野の我々の無力は，効用

と意味を持つ資格認定の周りに社会学的実践を再編するよう我々を心構えさせる。そのような努力なしに、行政管理者はその認定されたプログラムが院生を学界、政府、業界の職にうまくつけられる大学学部を支援しがちである」。だがそのような努力はあまりにおそすぎないか。William T.Whiteからの電子メールに「カウンセリングを除いて、私(White)は社会学者によってのみ得られる、社会学に固有の訓練によってのみ得られる expertise に対するはっきりとしたニーズが全くないことに気づいている。カウンセリングさえ、大半の社会学者は心理療法の訓練を受けていないからばくちである。私はそのような資格認定がいずれどれだけ有意義に状況を改善するかいぶかしく思っている。社会学が資格認定を正当化する何を提供するのかね」。Whiteの返信は次のことを明らかにしている。「何らの応用の基盤がなく、理論と調査をテストしたり、無感覚を刈り取る良い方法はない」。

それでは、応用の基盤を容易に破壊できないときに無感覚をどうしたら刈り取れるのか。私の答えは、我々が戦術を変え、臨床家や実践家となる代わりに、工学士となることである。ここには重要な違いがある。なぜなら、工学は大半の実践よりも理論的に情報量が多く、厳密であるから。資格認定の芝生をめぐる戦いは敗北したのだから、社会工学をプロデュースするための厳格なアカデミックな基準を開発しましょう。我々が学界の内外に尊敬を獲得したいなら、我々はもっと厳密で、もっと規律を持たねばならない。工学精神は我々を正しい方向に連れて行く。

### 1.3 それでは我々は何をすべきか\*

\*原題は「社会学的実践はなぜ周縁化しなければならなかったか」である。

略

かくして、アメリカ社会学の歴史は我々に工学的応用を持つ学問になるいかなる実際の契機も与えてこなかった。我々がそうしたいと望んでいると仮定するなら、我々は何をすべきなのか。

- (1) 科学の認識論にコミットした抽象的な理論的言明を調査と社会学的実践に結び直す。
- (2) 調査においてはるかに多様な方法を利用し、サーベイ・リサーチの役割を下げること。なぜなら、後者は調査と理論を断絶させる張本人だから。
- (3) 次の観点から理論の効用を査定する。理論的アイデアが実世界の問題と何らかの関連を持つか。持つなら、経験的リサーチと工学的応用において検証されうるように、理論の抽象水準をどう下げることができるのか。
- (4) 我々のイデオロギーコミットメントと、これらが良き社会の概念にいかにか翻訳されるか明示し、これらの概念をあぶり出し器の上に置け。イデオロギーに受け入れ可能な

理論の種類と工学的応用を駆動させることは避けよ。

我々がこの種の精神的規律に従事することができなければ、次のようなネガティブな帰結が後続する。

- (a) 我々は「政治的正しさ」の基準に影響されるようになり、そのような正しさに従わないデータ、理論から自分を切り離すようになる。
  - (b) 我々はほとんど常に我々の知識に進んで支払うクライアントに顔を向ける。我々はクライアントのイデオロギーにこびを売る必要はないが、その金が有用な知識を買い、社会学を正当化するのを助けるものを侮辱するのは出遅れものである。(ついでに、あなたがこびることを恐れるなら、私はあなたのイデオロギーコミットメントの強さを疑問視する)。
  - (c) 我々はその問題を資格認定された心理学者、首尾一貫して組織された経済学者に引き継がれる「空の中のパイ」思考家と定義されることになろう。
  - (d) ひとつのイデオロギーが別のイデオロギーを生み出し、戦う派閥間の平和が、我々の思想の真理ないし虚偽と有用性へのコミットメントの代わりに、相対主義の代償のもとに購入されるので、われわれは唯我論に墮する。
- (5) 我々の科学からイデオロギーコミットメントを棚上げする際に、我々は、科学と道徳的言説は重要な仕方で互いを律することができるということに気づくであろう。
- (a) 工学精神と結びついた科学は、我々の道徳心の目標と理想が実在的かそうでないかを我々に告げることができる。理論的知識は我々とクライアントの一部に、我々ないし彼らが欲しているものが不可能であることを教えることができる。我々の科学が我々の道徳心を律する際に、我々はますます実在的となる。我々が現象についての我々の知識を所与として、何をすることができるか尋ねることによって、工学士のような我々が思考を始める。それによって、我々は我々自身、我々の学問、我々のクライアント、世界に一層役立つようになる。
  - (b) 道徳心は多様な仕方で我々の科学を磨くことができる。
    - (1) 道徳へのコミットメントは理論と調査が取り組むべき問題に向かわせることができる。我々がこれらの問題に取り組む理論と調査方法を開発するにつれて、我々の科学はますます適切なものとなる。
    - (2) 道徳へのコミットメントは抽象性の雲や批判的けちつけに理論家が向かう傾向を阻止し、社会学の理論的翼が理論的アイデアが何らかの実用的な仕方で利用されうるかどうか尋ねることを強制できる。もし理論家が絶えず彼らのアイデアがいくつかの実世界の問題を解決するのにどうしたら利用されるか

尋ねるならば、彼らはもっと良い理論を生み出すであろう。

- (3) 道徳へのコミットメントは何らたやすい回答が想起しない社会的出来事をめぐるパラドックス、ジレンマ、混乱をしばしば生み出すことがある。上記の種類未決の問いは、理論家に道徳的問いをもっと処理しやすい問題に解体することによって、解明を提供するように触発する。最終的に、この種の活動は、利用されうるもっと良い科学に役立つ。
- (6) 公の討論に入りなさい、ただしもう一人のイデオログとしてではなく、社会問題に関わる工学を理解する者として。つまりある問題を駆動する力、我々の工学的知識が解決を組み立てるのにどのようにしたら利用されるか理解する者として。社会学者は理論的アイデアの効用を民衆に証明すべきである。

もし我々が上記の諸ステップで提唱されたことに従おうとするなら、社会学はもっと良くなるだろう。我々の理論は 公の討論に入り、工学的応用において我々の知識の有用性を証明しなければならないことによって、規律ある学問となるであろう。同じことは、歴史的比較のデータ、民族誌、インタビュー、実験、サーベイにいたる広範囲な方法を用いる調査にも当てはまる。最も重要なことに、もし我々が上記の諸ステップをラフな指針とするならば、我々がクラフトと専門職を実践するときに、(私の同僚の社会学者と私が共有する) 左翼イデオロギーを吐露する傾向が阻止される。もし我々が社会学自身のこの種の改革を試みないならば、恐ろしいことが社会学に降りかかるだろうと私は予想する。

- (1) もし我々が今の道を歩み続ければ、理論は相対主義、シニシズム、ペシミズム、唯我論の炎に囲まれたポストモダンの地獄にますます下降するであろう。理論はテキスト、イメージ、言葉遊び、他の正に不適切な言明に過ぎなくなろう。
- (2) 私立学校の学生(少なくともその父兄)は何らの実用性を持つように見えない「希釈された」人文学に授業料を払うのを拒絶し、おそらく州立大学は、社会学部を閉鎖し始めたり、社会学部の残りを他にプログラムに統合したりし始めている。ASAが学部の閉鎖に対する反応のほとんどパラノイドな仕方は、ASAは根本の問題に到達することをほとんどしていないが、我々はどんなに傷つきやすいか強調し、誰かが真っ先に社会学部を閉鎖したがっているのはなぜだと尋ねることである。
- (3) 我々は世界のある部分に気違いになる留学生のためのサービス学部となるであろう。つまり文化人類学部が文化的異国情緒を必要とした人々にしたのと同じサービスを提供することになるだろう。
- (4) 我々は新しいコース(講義)、ASAに新しい部会、あたらしい政治的に正しいイデオ

ロギー、一般的にいえば、学生を確保し、職業団体の成員を維持し、学長を喜ばせるために望まれるものは何でも提供する知的売春婦に変身することであろう。理論的コアを欠いた学問だけが自分を売る傾向がある。

多くの点で、上記の多くは既に起こっている。我々の雑誌の理論はおおむね、世界を説明すること以外のすべてに関するものである。

ASAの理論部会は多様なオリエンテーションの混合であるが、この数十年にわたって、ポストモダニストと政治的正しさの提唱者によって牛耳られてきている。我々は人文学のスパークを持つ学生を惹きつけ、教えるが、彼らはすぐに我々の曖昧な理論と方法のジャケットブーツの教示によって離れていく。我々は説明科学であるふりを見せないで、メディア、犯罪、セックス、薬物使用、ギャング、逸脱者等の今日の異国情緒を教えるサービス学部となっている。我々は、無思慮で学問のない学生に訴えるために、ほとんどあらゆることを進んで教え、我々の重要講義を進んで希釈している。

おそらく、社会学はそうしようという努力にも拘わらず、人的サービスの資格認定への明確な道を提供していないので、心理学のようなビッグ科学になることは欲していないだろう。しかし、我々は公共部門、民間部門での工学的応用で利用されてきている首尾一貫した理論的原理とモデルの集合を持つ経済学のような、大いに尊敬される科学になることはできよう。尊敬される学問は学長、事務長によって閉鎖はされない。登録者が多くなくとも、それらは大事にされる。社会学は公立大学ではその生き残りを維持するために登録者数によって駆動してきた。社会学がサーヴィス・プログラムである私立大学ではその度合いは低い。この戦略は我々の登録者数が鰻登りの1960年代に登場した。アカデミック社会学への最初の唯一度の資金の流入は、1960年代の学生の大群からやってきた。今日、我々は消えて久しいシネマを追求し続けている。その代わりに我々が追求すべきは、工学的応用を備えた理論に精通した調査である。この種の精神的規律が我々の目下の学生の多数派にアピールしなければ、我々は多くを失わなくとも、そのような学生を欠くたくさんの学部を失うかも知れない。社会学者にアカデミックな芝生戦争を続けさせ、(学問的なメリットがあろうとなかろうと200人の要望があればすぐに設立される)ASAに新しい部会を設立させるのは、後者の脅威である。重要な学問はこのようには設立されない。それは我々が世界中に必要とする注目する学生を惹きつける累積的知識によって創出され、維持される。

## 2. 社会工学は聞こえるほど実際に好ましくないものか？

【梗概】 社会学的実践と臨床社会学は社会学の工学的翼によって補完される必要がある。

究極的には工学は、理論的原理の具体的問題への適用であり、社会学が工学的学問になり得ない理由は一切存在しない。この工学的志向が登場するのを妨げる社会学の主題に固有のものは何ら存在しない。むしろ、社会学における工学的アプローチの展望は、もっと正確な理論が開発されるかどうか、そのような理論がテストされるかどうか、クライアントの抱える問題に取り組む際に実践家が理論的アイデアを利用しようとするかどうかにかかっている。

## 2.0 序論

成功を収めている科学はすべて工学的応用を持っており、社会学がこの意味で成功を収められないという理由はない。むしろ、応用社会学、臨床社会学、社会学実践のいずれであれ、社会学を利用しようとする試みは、社会学が自らを工学士と見なし始めないならば、潜在的なクライアントによって完全に受け入れられることは決してないであろう (Turner 1998)。大半の社会学者はこの指摘に好意的でなく、いやがるのである。社会工学がそのような不快な意味合いを持つのはどうしてなのか。

答えの一部は悪い目的のために社会学的知識を使うビッグ・ブラザーズによる過剰統制とコントロールのオーウェルの見解にある。社会工学について語る際に、人間の被験者に対する同意できない実験、新たな抑圧的社会的配列をつくる実験のナチスのイメージを想起することが容易であるが、これらの特徴づけはすべて払拭できるものである。工学についてのそのような肖像画は、社会学者、その他の社会学者が社会工学の試みの成果を確定するための十分に洗練された人間行動と組織についての知識を持っていることを想定している。しかし、われわれがたとえ洗練された人間行動と組織についての知識を持っていたとしても、ネガティブな意味での社会工学の肖像画は実は正反対のことが正しいときには、その知識は悪の目的に使用されるであろうということを想定する。

社会学者が社会工学に不信感を抱く理由のもう一つは、それが社会学者にもっと厳密でもっと規律されることを強いることにある。第一に、社会学は非常にイデオロギー的分野であり、実際に不可能なものに直面して逃避しても、そのイデオロギーを放棄することをしばしば躊躇する。工学は何がなされるかに関するものであり、工学的アプローチは社会学者によって抱かれている多くのイデオロギーの存続可能性と適用可能性に不可避的に疑問を投じるであろう。第二に、社会学者はしばしば反科学であり、すべての知識は相対的であり、科学の法則を通じて理解される頑固な世界というものは存在しないし存在し得ないと述べる。社会工学はこの心地よい批判に疑問を投げ、大半の社会学理論化を構成する哲学的に論争のある社会の素朴な探求者となる。第三に、集合主義の美德へのイデオロギー的共感にも拘わらず、社会学者は *rugged individualists* (荒削りな個人主義者) である。社会工学はあ

なた自身のことをする社会学の知的ナルシズムを暴露する。

しかし、これまでのところ、実効的な社会工学への主要な暗礁は、理論と調査と実践との間に目下存在している分離にある。社会工学はオーウェル的に見えるために、社会学者のイデオロギー的慰みに水を差すので、あまりに科学的すぎるように見えるので、あなた自身のことをする社会学の知的ナルシズムを暴露するので、拒絶される。しかしこれらの特徴づけがなくても、はるかに基本的な問題が存在する。社会学のあまりに多くの理論家が理論化を行っていない。あまりに多くの方法論者や調査者が質問紙をハンドアウトし、コンピュータのプリントアウト上の大きな相関をサークルしている。あまりに多くの実践家が一般理論を臨床分析、アドボカシー、記述的リサーチという自分たちの試みに無関係なものに見なししている。その最終産物が、それぞれが別々の道を進む結果になっている。工学的志向に向かう最大の障害を呈しているのが、社会学のうまく統合された下位分野となすべきものの内部と間のこの狭量さである。理論と調査と実践の間にこの分離が存在する限り、社会学はすべきで、できるだけ役に立たないであろう。私が提唱するのは、我々が一度損じると元に戻らないものをもう一度元に戻すことである。社会学を工学的学問と見なすことは、社会学理論をレリバントにさせ、応用社会学を一層役立つものにし、ひとつの道を提供するであろう。

## 2.1 工学とは何か

社会工学とはどんなものかを尋ねる前に、工学とは何かを尋ねるべきである。工学は宇宙の属性に関する知識を何かを建設する、何かを台無しにする具体的な問題に適用することを伴う。道路、建物、港湾、運河、橋脚、熱工場、電子システム、その他組み立てられるもの何でも、エンジニアは何かを組み立て可能であり、それをどのように組み立てるか述べようと努める。ポケットライナーを持った怠け者としてのその貧弱なプレスにも拘わらず、エンジニアは何か有用なことをしている。もちろん、大切な隣人を破壊する武器システムないしフリーウェーのいずれでも、他者にしばしば危害を加える。エンジニア自身は一般理論原理に曖昧な感覚しか持っていないかも知れないが、大半の工学は実践的問題に抽象的理論アイデアの適用を伴う。というのは、工学においては、理論は通常工学の一領域に適合する単純な親指ルール (rules of thumbs) に変換される。かくして、もし我々が社会工学を持とうと思えば、我々は経験界に照らして照合された、実践家に情報を伝えることができる親指ルールに変換された、何らかの理論的原理を持たねばならない。

今や、社会学者によって取り込まれる多くの実践的問題は工学の適用の外部に位置することを強調したい。クライアントはヘッドカウントや他のタイプの記述的情報だけを欲しているかも知れない。上記の事例で必要なすべてはデータを収集するための適切な方法論である。

また科学の強引な適用よりも直感や似たような問題に対する過去の経験に依拠する実践家が直面する問題も存在しよう。明らかなように、すべての臨床社会学、応用社会学、社会学的実践が工学的科学に作り替えられることを提唱しているのではない。私が主張しているのは、社会学が工学的翼を持つべきだということである。

工学の鍵は次のものを持つことである。

- (1) 有力な理論的原理
- (2) これらの原理が系統的な経験的照合の結果正しいことが判明するという確信
- (3) これらの原理が実世界の問題に適用される経験
- (4) 同僚のエンジニアに伝達可能な親指ルールに経験的知見や理論的原理をどうやって変換するかという知識

社会学を工学にする上記のステップのすべては他のステップに互いに依存する。

## 2.2 社会学的実践の展望（見込み）

理論と調査の再統合の最も有望なひとつは実践にあるという見解を持つようになった (Turner 1998)。実践家が調査に従事するか所与の方向に状況を変える相談に乗っている限り、理論はレリバントである。実際、理論はレリバント以上である。それは企画に批判的である。理論がなければ、何をするか、どのように進めるか、介入からどんな結果が生じるかを知ることは困難である。理論があれば、実践家は調査と介入に情報を伝えることができ、説明ツールを持つ。そこで実践家はレリバントかも知れない理論原理に注目する必要がある、抽象原理のある特定状況の個別性に変換することができなければならない。実際、理論家と調査者のコラボレーションや、状況の独特の側面に精通することは大いに望ましい。だがコラボレーションは制度化されてようやくうまく長期にわたって働くのである。かくして、我々は実世界への適用を持つ理論を開発する必要がある。理論がゲネリックな (generic) 社会現象に向かう限り、それは常にレリバントであろう。鍵は変換であり、我々が理論家と実践家のつながりを制度化し始めることができるのはここである。

私がこれまで述べてきたことの中にいくつかのステップが含まれている。

1. 既存の理論は原理に転換される必要がある。大半の理論のメタ理論的、歴史的、仮定的覆いは引きはがされ、理論によってカバーされる現象を駆動するゲネリックな諸力の力学についての言明だけを残す。
2. 理論的原理の経験的な立証は原理の尤もらしさの感覚を手に入れられるように編纂要約される必要がある。尤もらしくみえる原理は社会工学のコア・アイデアとなるはずである。

3. これらの原理は、その効用が容易に気づかれるように、理論家でないものにも入手される必要がある。理論家は原理を親指ルールに変換する必要がある。特に数理的に述べられた理論に関しては。散文的に語られた理論に関しては、この変換は自明であるが、ここですら、目標は、理論をその中枢の要素に還元することであるべきである。
4. 実践家は彼らの訓練の中でこれらの原理を学ぶ必要がある。大学院プログラムにおける従来の理論コースは、実際に何かを説明する原理よりも学説史とメタ理論に焦点をおいているので不適切である。かくして、我々は学生のコア訓練の一部として、「理論と社会的実践」に関するコース（講義）を必要とする。講義の他に、我々は主要な原理を要約したテキストブックを必要とする。『社会的実践のための諸原理』を執筆することは、実際には社会学のテキストブックの通常は無感覚の代わりに、いくつかの原理を持つだろうから、ラデカルであるだけでなく、有用でもあるであろう。

メタファーを用いれば、わたしが社会的実践のために念頭に置いているのは、その基本的な重要部分だけに裸にされた理論的原理のバッグである。諸原理は事情が命ずるままに引き出され利用され、バッグに戻される。我々はもはや、シンボリック・インタラクショニストの視点、コンフリクト理論の視点、合理的選択理論の視点等を取らない。むしろ、我々は裸にされた諸原理のバッグから事例にふさわしいと思われるものを取り出すであろう。

私は、このプロジェクトが幾分空想的に見えるかと確信しているが、我々はそれを今すぐ実行できていると思っている。実際、この種の仕事は現在なされつつある。私が提唱しているのは、我々は既に存在するものを拡張し、制度化することとそれを社会的実践、応用社会学、臨床社会学の重要部分とすることである。コントが実証主義に賛成の議論をしたときに、彼は非常に多くが誤認したような raw empiricism 素朴な経験主義を意味したのではなく、世界を作り替えるために用いられる理論の開発（ニュートンの引力の法則はその原型）を意味した。それは依然として社会学にとって最良の希望であるから、このビジョンを捨てるべきではない。ラデカルなイデオロギー、個人のバイアス、直感、ヒューマニストであること、その他の動機づける力は実際には人々を助けないであろう。社会科学の諸原理の適用が助けるのである。実際、我々を先導する科学がなければ、我々は自分をベターに感じさせる positive harm（ポジティブな危害）をすることができる。

理論は我々に、介入の中で何が働くかを知らせるだけでなく、何が働かないかも知らせる。イデオロギーないしヒューマニズムが我々を先導するとき、我々が知ることができるものに何ら制限はない。理論が我々を方向付けるとき、それは何が可能でないかを教える。それらは社会的宇宙の力に逆らうので、何物かはなされ得ないのである。社会工学が善であるには、

実在するものと可能であることによって我々のイデオロギーとヒューマニズムを和らげなければならない。不可能な夢を夢想することは、気分を高揚する音楽をつくることだが、それは最終的に人々を傷つける。あまりに多くの社会学者がドンキホーテのようにふるまい、エンジニアのように振る舞わない。

### 2.3 工学原理をどうやって開発するか の例証

略 (別記)

### 2.4 社会工学実現を遮る障害

上記の例証は工学原理ないし親指ルールの例証にすぎない。明らかに、私はそれらを系統的な仕方では上げていないし、時間と努力が与えられれば、多くの親指ルールはかなりの経験的な立証を受けた理論的なアイデアから開発されうると考えている。それゆえ、問題は工学原理を開発することではなく、適用することにある。まず、我々は状況内の初期条件が親指ルール内に特定されたそれと一致するかどうかを知る必要がある。次に、我々は何が達成されるか、その目標をどのように達成するかというビジョンをすでに持っているクライアントのニーズによって制約されている。上記の状況下で、クライアントのバイアスは親指ルールを使うのに可能なものに変更されねばならない。社会工学は典型的には実施する力よりも説得する力をもつだけである。

第三に、我々はいくつかの親指ルールが実践において不可欠である事実留意しなければならず、どの親指ルールがレリバントであるか知らねばならない。関連してもっと重要なのは、社会界の諸力が交錯し、時には互いに中和し合い、時には互いに増幅し合う点である。かくして、状況は、実践において容易に管理し得ず、行方について予測を難しくする矛盾する諸力を提示することがある\*。社会界の多くは、気象学や他の応用科学に顕著な実在界の特性をみせる。我々は働いている諸力を理解しているが、これらの諸力は複雑に交錯し予測することが難しい帰結を生み出す。社会工学は常に交錯する諸力と対面し、時には社会工学において諸力の操縦の堅い予測を行うことが難しいことがある。しかし、気象学者はこの事実の故、彼らの知識の利用をやめることはない。社会学者はどちらかであるべきでない。しかし我々は大半の社会工学は、予測不能というこの要素を持つことを自覚しなければならない。

\*例えば、我々はネットワークが濃密でない、権威の行使が必要な組織の中で連帯を高めることにチャージすることがある。権力と権威の諸力が連帯を増進する諸力と衝突し、我々がたとえ連帯を生み出す条件と権威の行使を支配する条件を理解していたとしても、多くのことを行うことは困難である。

## 2.5 社会工学実践家に

私が提案していることは心のミーティングである。理論はもっと正確でフォーマルでなければならない。調査はもっと理論駆動的でなければならない。実践はもっと科学的で、社会的宇宙の基本特性の働きを説明する理論的原理に依拠しなければならない。上記のすべてを容易にこなしうる者は誰一人としていない。我々は分業を必要とする。理論家として私は自分の仕事を理論的原理をできるだけ明確で簡潔に述べ、これらの原理を使える工学原理ないし親指ルールに変換することであると見ている。私は実践家が直面する実世界の問題について考えねばならないときに、これだけに行うことができる。というのは、私が自分の理論化に磨きをかけ、利用に付すことができるのは、実世界での諸力の操縦と取り組まねばならない際であるから。

実践家は理論家がレリバントなこととして何をするかを知らねばならない。応用社会学者や臨床社会学者は彼らのバイアスから進んで離れるように努めねばならない。実践家はイデオログであるべきでない。彼らはシンボリック・インタラクショニスト、コンフリクト理論、合理的選択理論、その他たくさんの仮定のパッケージを運び、問題にしばしば無関係な理論的視点に過剰にコミットすべきでない。彼らは過去の経験の外挿が必ずしも現在未来の最良の指針でないので、経験に依拠することに慎重でなければならない。彼らは科学を彼らの使命に関係ないものと見なしてはならない、むしろ社会的介入に最も重要なツールと見なさなければならない。彼らは理論家と、少なくとも社会界がどのように動いているかを説明する原理を開発することに専心している理論家ともっと積極的な対話し始めなければならない。

実践家と理論家が一緒になるときのみに、コントの実証主義の夢は実現される、もっと直接的にはほとんどの初期のアメリカの社会学者の目標が21世紀社会学の指針(灯台)となる。実際に、我々の大半は社会学にはその利用のために関心を持っている。社会学が他者をどのように助けることができるか、社会学がどのように違いを作り出すことができるか、どうしたら世界をもっと良くすることができるか。我々の中で理論家、方法論者になりたいと望んで社会学をスタートした者はほとんどいない。ある者は、多くの学期に社会学理論を構成するマインドを数える言説や質問紙調査の過度の偏重に対する反動として実践家として、またこの領域に移住してきた他者として始めたことであろう。しかし、今日学生、我々の大半に対して社会学が惹きつけるのは、より高い目的のために社会学を利用することであった。実践とは我々がこれをどのようにするかであるが、それは理論に精通した実践でなければならない。我々がイデオロギー、狭い経験、個人的バイアス、狭い理論的視点への知的コミット、ある方法論の過剰な利用に実践家としての我々の活動を席卷させると、我々は他者にポジ

ティブな危害を加え、我々すべてが最初に社会学者になることを欲せさせた夢そのものを破壊してしまう。社会工学は、これらの傾向を避け、我々の援助を必要とする世界に意味を持つひとつの方法である。社会工学は、権威主義の竜ではない。私の見るところでは、彼らはもっと人間らしい世界への最良の希望である。

社会工学は、政策に関する大きな公の討論でよりもむしろトレンチの中で実践されている。社会学者がローカル、パブリック、プライベートな場所で彼らの知識の有用性を証明するまで、我々は公共政策に関する全国的な論争に加わるよう招かれまいであらう。その上、これは工学が実践されうるイデオロギーとポリティクスで重装備したアリーナではない。むしろ、社会学がどのように役立つのかを証明しようとするのは、様々なコンテキストにいる多様なクライアントと一緒に仕事をする社会学者である。社会工学、別の名前でも良い、理論に駆動された活動をそのコアに持つものは、世界で意味を持つ最良のアプローチである。

社会学を学界の内外で重要にするのは実世界での社会工学の上首尾な実行である。人々が直面する問題の大半は、組織的な問題であり、社会工学によって解決可能である。それゆえ、工学に対する我々のバイアスを捨て去り、社会学を有用にする任務を背負うときである。

### 3. 工学原理をどうやって開発するか例証

#### 3.0 序論

私が当初この節を書き始めたときには、理論的に精通した工学アプローチを例証するために、フォーマル理論からいくつかの親指ルールを今から開陳することを読者に意図していた。戻って、少数の事例を示すことは比較的容易であろうと考えながら、この地点で論文を脇に置いてしまった。この事柄について考えれば考えるほど、私が当初構想していたよりはるかに多くの追加的な理論的仕事が必要であることに気づいた。

私が十分に開発された理論的アイデアを取り上げ、実世界状況にそれらを適用するために変換することを始めたとき、いくつかのことに気づいた。まず、もし私が実際に私のサジェスションに従って行為する者にアドバイスするなら、わたしはもっとうまくいくだろう。仮説を開発する、リサーチ・プロポーザルを執筆する、グラントを獲得する、仮説を検証することはひとつのことである。もしあなたが間違えると、最悪のシナリオは、あなたのキャリアはチューブを下がるが、雑誌が論文としてドレスアップした何らかのデータを受け入れる意思があれば、この最悪のケースは開花しない見込みが強い。しかし、他の人々の生活に影響する状況を変更するためにお金が使われつつあるならば、人の責任は劇的に高まる。このようなペーパーの練習でさえ、私はこの責任の重さを感じ始めた。第二に、大半の理論的ア

アイデアは同じ現象のやや異なった側面に力点を置くのでバリエーションを持つ。もし私がひとつのバリエーションだけを取り上げるなら、私はこれらのバリエーションを比較的単純な親指ルールに総合する理論家として私の職務を遂行する意思はない。かくして、私はひとつの理論的アイデアを取り上げ、それをそのエッセンスに解体するのだけでなく、関連する理論的諸アイデアをとりあげ、実世界に運ばねばならない。

多くの点で、これらの込み入りは理論家にとってはワクワクするものである。工学に非常に重要な精神的規律（mental discipline）はひとつの理論的アイデアの様々な定式化に切り込むという追加的仕事をしなければならない。それが数えられる場所つまり実在する人々の世界で間違うという幽霊によって掛け金がつり上げられるときにのみ、社会学のこの余分な方策の必要がキックインする。私はひとつの理論的アイデアを取り上げ、その実践についての意義を引き出すだけでなく、いくつかの関連する洞察から新しい理論的原理を開発せねばならなかった。そこで私の次の事例は、私が当初構想したものより私にはるかに多くの努力を伴わせることが判明したが、最終産物は、社会学の工学翼についての私が念頭に置いていたものの例証である。

### 3.1 公正と公平

多くの実世界状況は、その中にいる人々が不公平に扱われていると感じ、その結果一生懸命働かなかつたり、退職したり、集団、組織、全体社会の目標に不満を抱く対決に従事するので、問題を孕んでいる。クライアントは人々の不公正感から生じる問題を減らすことに関心があるように思えるであろう。確かにこの争点に関する文献は全く不在なわけではないが、その多くはかなり哲学的であり、私の定義では、工学の適用にはたいして啓発的ではない。しかし、この争点に関してかなり良く展開された社会学理論があるし、興味深い経験的な知見も存在する。それでは、これらを親指ルールとして役立つシンプルな原理にどうしたら変換できるだろうか。まず、様々な理論的アイデアを整列させる必要がある。

- (1) 交換理論（e.g. Blau 1964）は、交換における人々の満足感（彼らの利得が費用に比例する時に高まることを述べる。この分枝（e.g. Homans 1961）は、利得が費用プラス投資に比例することを強調する。何が公平であるか計算するときに、人々が自分の費用と投資を他者のそれと比べて査定する、比較の要素を付加する分枝（e.g. Festinger 1954; Jasso 1980）もある。威信と権威の既存の地位システムが、その威信と権威が正当性が承認されている人物が高位の人々、低位の人々の双方によってもっと多くの報酬を受け取る資格があると見なされるような準拠構造を創出することによって、公平の計算に影響を与えることを付加する分枝（e.g. Berger et al. 1972）もある。

- (2) 分配のルールが不在の場合、報酬が貢献に比例して分配されるべきことを述べるものと規範的な理論も存在する。分配のルールが適所にある場合、諸個人はそのルールを受け入れる場合に、正しいと見なすであろう。

上記の理論にはすべて多くの分枝が存在するが、社会工学士としての私の目標は、それらを親指ルールに煮詰めることである。

様々なアプローチを眺めると、それらはすべて受け取る報酬が個人の知覚された費用と投資に比例すべきという見解に収斂しているが、我々はいくつかの複雑化の要因を考慮に入れる必要がある。費用、投資、報酬の知覚を歪める地位の不均等の影響。費用/投資に対する報酬の比の厳密な計算に力点を置く（もしくは変更する）ことができる規範、費用、投資、報酬が他者のそれと比較される過程。突然ながら、この親指ルールがたいして役立たない多数の指ルールとなってきている。だが、我々は比較的シンプルな原理をここで定式化できるものと思っている。

ある状況での人々の公正・公平感は、現在受け取った報酬のかわりに今及び過去に放棄した報酬の知覚の関数である。ただし、これらの知覚は次の3つのタイプの比較によって変更される。

(1) 似た位置の人々との比較

水平的分業、垂直的分業内のほぼ同じ地位の人々は、それをすることが可能な場合、彼らの費用、投資、報酬を互いと比較するであろう。これらが同じかほぼ同じとみなされる場合には、人々は自分たちが公平に扱われていると知覚するであろう。異なっていると見なされる場合、不公平と感じるであろう。

(2) 上位の人との比較

低位の人は、それをすることが可能な場合、彼らの費用、投資、報酬を上位のそれと比較するであろう。上位の人が彼らの地位を低位の人によってそれに値するものと知覚される（何らかの基準によって正当と認められる）場合には、彼らは自分たちの間の不均等な報酬分配を公平と見なすであろう。正当と認めない場合には、上位者の報酬も下位者の報酬も不公平と見なすであろう。

(3) 下位の人との比較

上位の人は、それをすることが可能な場合、彼らの費用、投資、報酬を下位のそれと比較するであろう。上位の人が自分の費用、投資、報酬を下位のそれに比例している（に比べて上位にある）と知覚し、報酬分配の信念や規範に比例していると知覚する場合、自分たちは公平に扱われていると知覚するであろう。そうでない場合、不公平に扱われていると

知覚するであろう。

この親指ルールを書くにはいくらかのスペースを要するが、それは実際にきわめてシンプルなものである。分業の異なる地点にいる人々は、常に (a) 彼らの費用と投資、(b) 同地位か上位か下位にいる者の知覚された費用と投資に比べて自分の報酬を査定する。規範は知覚を変更するが、基本的な力学は、費用と投資と関連しての報酬の査定と比較をめぐって回転する。人々が (a) と (b) が並んでいると知覚すれば、公平に扱われていると感じる。同じ地位、上位、下位の者が費用、投資に比して不当に多く得ていると見られる場合には、彼らは不公平と感じる。

おそらく上のすべてはくどいと見えるだろうが、これは我々の理論的原理のバッグから引き出した強力な親指ルールである。その上、それは検証されうるものであり、この場合には、ある組織のどの地点で人々が不公平と感じるかを知るために質問紙とインタビューが用いられる。この原理に要約される力学を知るとは、多く払いすぎている人々から他者がどれだけ手に入れているか隠されている者まで、不公平に解決策を提示している。

### 3.2 期待状態

期待状態に関する非常に膨大な文献があり、社会学の多くの理論と違って、これは社会学の实践で利用されてきている (Cohen et al.1988)。基本的議論は、タスク集団の成績が集団成員によって評価され、相対的な成績に基づいて、諸個人に地位 (権威、威信) が与えられる。その地位が将来の成績の期待となる、というものである。中枢のアイデアは、期待状態が集団に創り出され、期待状態が外部から未分化な地位特性 (e.g. gender, race, age) として持ち込まれ、期待状態が既存の権威/威信システムに組み込まれる、というものである。いったん定着すると人々は期待の観点から行為し、期待状態に従わない者にサンクションを課す傾向があるので、期待は自己成就する予言のように働くので、変更することが容易でない\*。

\*この理論の要約として Wagner/Turner 1998 を参照。

ここに、我々が親指ルールを開陳する際に役立つもっと一般的な理論が存在する。タスク集団に主たる注目をする期待状態理論自体と異なって、このもっと一般的な理論は、ほとんどすべての状況において、人々は自分たちがどのように扱われるべき、他者がどのように行為すべき、何が起こるべきかに関する期待を抱くようになることを強調する (Turner 1999, 2000, 2002)。これらの期待は多くの源泉——地位特性、規範と信念、自己像、過去・現在

の経験——からやってくるができるが、重要な点はそれらが登場することである。私自身の最近の著書（2002）で、私は期待状態と情動（感情）のアイデアで仕事をしてきている。総じて、諸個人の期待が儀礼化されるとき、諸個人は満足から幸福にわたるポジティブな感情を味わい、儀礼化されないと、怒り、恐怖、悲哀のネガティブな感情を味わう。

このシンプルな親指ルールは、期待が大半の状況の情動的雰囲気と風土に影響を与えるので、有益な含意をもつ。ポジティブなサイドでは、親指ルールは理解することがたやすい。

期待が充足されると、人々はグッドと感じ、様々な幸福感を体験し、表明する。

もっと興味深く、社会工学士をクライアントに運ぶ傾向があるのは、ネガティブなサイドである。期待が充足されないと、人々はネガティブな感情を体験する。

重要な質問は、どちらの感情か？どんな組み合わせか？どの水準の強さか？他者やより大きな社会的・文化的コンテキストにどんな影響を及ぼすか？

私の最も最近の理論はこれらの質問に答えようと努めている。我々の理論的諸原理のバグのために、込み入った複雑な理論が親指ルールに要約できることを私に示させてくれる。

人々の期待が出会いで、特に繰り返された出会いで実現されないと、彼らはネガティブな感情を味わう。彼らの期待が高いほど、期待が実現されずに時間が経過するほど、引き起こされる感情はますます強くなり、それらが他者やもっと包括的なシステムに向けての行為に影響を与える傾向が強い。

- (1) 人々が期待を実現できなかったことで自分を責める時、彼らは悲哀を感じる。

人々がこの失敗の結果に恐れを抱き、自分に怒る（腹を立てる）ならば、失敗が評価的な価値や信念まで判定される場合には、悲哀、怒り、恐怖のこの複合は恥と罪の感情を引き起こすであろう。

- (2) 人々が期待を実現できなかったことで、他者を責め、この他者に怒りを味わうときに、そしてその他者の方が自分よりも力があるとき、彼らは恐怖心も味わうであろう。

(a) (他者の方が自分よりも力があるので) もし彼らが他者に怒りの感情を表明できないならば、しばしば彼らは自分より力の弱い者に、これらの他者が所属する社会的カテゴリーに怒りを転移するであろう。

(b) (それがネガティブなサンクションを招くという理由で) 彼らが怒りを転移しないならば、怒りを抑圧するかも知れない。それが今度は彼らの感情エネルギーと役割コミットメントのモーダルな水準を下げるだけでなく、強い怒りの散発的爆発の確率を高める。

私は、今執筆中の理論から親指ルールをもっと追加することもできる。

従業員が自分が働いている企業に敵意を表明するのはなぜか。

教師、経営者、その他権威ある地位にいる人々に対する偏見がなぜ生まれるのか。

人々が役割への同調が緩慢なのはなぜか。

上記の親指ルールはこれらの質問に単独では答ええないが、我々の理論的原理のバッグから引き出すことができるもののひとつであり得る。

### 3.3 サイズと分化

私におそらく社会学の最も初期の原理(コントによって最初に発見され、スペンサーによって展開され、デュルケムによって拡張された)に当たるものを取り上げさせて頂きたい。基本法則は、組織される諸個人の数が増大するにつれて、分業、ないし社会的分化も増えるだろう、というものである。

スペンサーはいくつかの重要な洗練を付け加えた。人口が増大するにつれて、統合の基軸が (a) 権力と権限を行使する独自の規制(管理)センターの分化、(b) 人々、資源、情報を動かすための独自の分配インフラの分化、(c) 人々、資源、情報を動かすための新たな市場メカニズムの分化に移行する。

デュルケムは別な洗練を付け加えた。分化が増大するにつれて、文化システムは分業の様々な場所にいる行為者にレリバントであるために一般化しなければならないが同時に、分業の結節点内の関係と結節点間関係を特定する限定的なものにならなければならない。

私はすでにスペンサーとデュルケムの理論の抽象水準をシフトしていることを認めるが、これは彼らが論じたことである。彼らの理論はマクロ水準の説明として意図されていたが、それらは管理の強さに関する多くの研究に最もインパクトを持った。そこでは理論家は知らないうちにスペンサー、デュルケムをメゾ水準におろしている (e.g. Abrahamson 1969; Blau 1970; Noell 1974)。しかし、学説史の泥沼にはまりこまずに、我々が実践家のためにどんな種類の親指ルールを開発できるかを見ることにする。

組織される諸個人の数が大きければ大きいほど、分業はそれだけ複雑になる。

- (1) 権威システムの垂直分化は、当初の成長期に急速にS字関数の発展を遂げ、平準化し、時によって管理の諸経費を減らそうとする努力の中で低下する。かくしてそれは曲線型関数となる。
- (2) 水平分化は組織される諸個人数の増加のゆっくりしたS字関数であろう。
- (3) 分化したユニット間の統合は次のものを通じて達成されるであろう。
  - (a) 人々、資源、情報を分配するための新たなインフラ

コーディネートされる人々の数が多くなり、その空間的分布が大きくなるほど、これらのインフラは複雑になる。

(b) 交換のための新たなシステム

容積, 規模, 分布範囲が大きくなるほど, 市場ないし市場に似たメカニズムが人々, 資源, 情報を分配するために用いられる傾向が強くなる。

(c) いくつかの水準で活躍する新たなシンボルシステム

それは、高度に一般的な評価的シンボル（イデオロギー）から分業の結節点内と結節点間の関係を定めるルールにわたっている。

この親指ルールは、集団、組織、コミュニティ、全体社会の如何を問わず、活動のスケールが大きくなるときに、いつもどんなことが起こるかを我々に教える。それはまた何が阻止できないかを教える。多くの人々がお互いに見ず知らずのものになり、彼らはお互いをつなぐシンボルをほとんど持たないであろう。彼らはますます権威に従うことになる。彼らは市場に入らねばならなくなり、お互いとの取引の多くは市場に似たものになるだろう（彼らのアウトプットを他の部署に売ったり、内部から購入する）。彼らは次第に市場勢力によってだけでなく、分配的なインフラによっても組織されるようになる。かくして、成長する組織出身のクライアントは「私は私の組織をどうしたらもっとパーソナルなものにできるのか」と尋ねるだろう。社会工学士としての我々のアドバイスは次第にこの親指ルールに盛られた現実と衝突するであろう。我々はこれらの力学を緩和することはできても除去することはできない。

### 3.4 パワーと依存

社会学におけるパワーについての最も有用な法則のひとつは Emerson (1962) によって定式化された。行為者 A の行為者 B に対するパワーは、ひとつの価値ある資源を B が A に依存する関数である。B が A によって提供される資源に価値を置くほど、B が利用できるその資源の代替源泉が少ないほど、B の A に対する依存は大きくなり、したがって A の B に対するパワーは大きくなる。この理論の最も興味深い部分は、Emerson が提案するバランスの原理である。他者に依存状態にある行為者（上の説明では B）は自分の依存を減じるように行為し、より好ましい交換取引に突き当たる。以下の親指ルールでは、わたしは 1 は Blau (1964) より、2~5 は Emerson の balancing principles から引いている。

B が A によって提供される資源に価値を置くほど、A によって B に提供される資源の代替源泉が少ないほど、B によって A に提供される資源の代替源泉が多いほど、A が B に

対して行使するパワーは多くなる。

AがBに対して行使するパワーは多くなるほど、BによるAのパワー優位を減じる努力を稼働させる。それには次のものがある。

1. BはAに強制したり、強制の脅しをかけることができる。
2. BはAによって提供される資源の価値を下げるができる。
3. BはAによって提供される資源の代替源泉を探すことができる。
4. Bは、自分がAに提供する資源の魅力を高めようと努めることができる。
5. Bは、自分が提供する資源のAにとっての代替源泉を減らそうと努めることができる。

ある状況がEmerson理論に定められている条件に合致することに気づく社会工学士は、秤を常に釣り合わせようとする依存的行為者の利用可能なオプションとこれが起こるのを抑えようとする支配的行為者の利用可能なオプションを知るであろう。非常にわずかながら、この働きを緩和する外部の力によって、釣り合わせようとする働きが働くことがある。

もしパワーホルダーのAがクライアントである場合、我々に恥だが、我々はどんなアドバイスを与えるべきかを知っている。

できることなら、Bの強制力の動員努力を削ぐ。

Bのバエアピリティにとって資源を重要なままに保つことによって、Bに資源を価値の骨抜きをさせない。

Bにあなたの資源の代替肢を見つけさせない。

もしBがあなたのクライアントなら、我々は潜在的なつり合い取りの操作をスキャンし、どれが最も成功しそうかを探ることができる。

### 3.5 連帯

多くのプラクティカルな問題は様々な社会的セッティングで連帯を生成する問題をめぐって展開している。かくして、連帯を生成する条件に関する原理は社会学に於いても肝要である。合理的選択理論から、ネットワーク分析、コンフリクト理論によって多くの連帯生成論が生成されている。それらの明白な違いにも拘わらず、これらの理論は連帯を生成する比較的少数の条件に収斂する。これらをシンプルな親指ルールに変換させて頂く。

あるセッティングにおける諸個人の連帯感は次の時に増大する。

- (1) 諸個人が高率の対面的相互行為に従事しているとき。
- (2) 諸個人が権威システムで比較的対等であるとき。
- (3) 諸個人が濃いネットワーク紐帯を見せ、構造的に均衡したポジション内にいるとき。

- (4) 諸個人が彼らの利害を脅かすことが知られている他集団と対立状態にあるとき。
- (5) 諸個人が彼らの関係を体現する評価的シンボル(信念とイデオロギー)を開発するとき。
- (6) 諸個人がお互いに対して、集団に対して日常的な対人儀礼に従事するとき。
- (7) 諸個人が連帯、連帯を支える儀礼と共に到来するポジティブ感情のために、集団に依存するようになるとき。

またも上記の条件は、我々に可能でないことを教える。例えば、一組の諸個人が他者にアクティブな権威を行使している非常に不平等な状況では、高い連帯は一層難しい。しかしながら、(1)(2)が強調するように、濃いネットワークで高率の相互行為を見せているときには、対等でない者の間でもある程度の連帯を持つことが可能である。実践家が目標が連帯を高めることにある状況にはいるとき、状況の個別性を所与として、上記の条件(一部でも)実現されうるかどうかを知ることがタスクとなる。

## References

- Abrahamson, M. 1969 "Correlates of Political Complexity." *American Sociological Review* 34: 690-701.
- Berger, J./M. Zelditch, Jr./B. Anderson/B.P. Cohen 1972 "Structural Aspects of Distributive Justice: A Status-Value Formulation." Pp.119-246 in: J. Berger/M. Zelditch/B. Anderson (eds.) *Sociological Theories in Progress*, Vol. 2 Boston: Houghton Mifflin.
- Blau, P.M. 1964 *Exchange and Power in Social Life*. New York: Wiley.
- 1970 "A Formal Theory of Differentiation in Organizations." *American Sociological Review* 35: 201-218.
- Cohen, E.G./R. Lotan /L. Catanzarite 1988 "Can Expectations for Competence Be Altered in the Classroom." Pp.27-54. in: Murry Webster, Jr./Martha Foschi (eds.) *Status Generalization: New Theory and Research*. Stanford, CA: Stanford University Press.
- Emerson, R. 1962 "Power-Dependence Relations." *American Sociological Review* 17: 31-41.
- Festinger, L. 1954 "A Theory of Social Comparison Processes." *Human Relations* 7: 117-140.
- Hechter, M. 1987 *Principles of Group Solidarity*. Berkley, CA: University of California Press.
- Homans, G. 1961 *Social Behavior: Its Elementary Forms*. New York: Harcourt Brace Jovanovitch.
- Jasso, G. 1980 "A New Theory of Distributive Justice." *American Sociological Review* 45: 3-32.
- Noell, J.J. 1974 "On the Administrative Sector of Social Systems: An Analysis of the Size and Complexity of Government Bureaucracies in American States." *Social Forces* 52: 549-558.
- Wagner, D./ J.H. Turner 1998 "Expectation States Theory." Pp. 452-465 in: J.H. Turner *The Structure of Sociological Theory*. 6th ed. Belmont, CA: Wadsworth.

#### 4. 社会学的実践における社会学理論の利用のために\*

\*原題は「社会学における科学的理論化の実践と社会学的実践における科学的理論の使用」

【梗概】 社会学的実践が社会学の周縁に位置づけられる理由の一端は、調査者が理論の検証にかからない方法論に重く依拠する一方で、理論家が検証可能な理論を開陳しないことにある。社会学の理論化はイデオロギー批判、メタ理論化、思想史（学説史）、古典理論家の英雄崇拜、認識論的否定主義のような、ゲネリックな社会過程についての一般理論を開発することから注意をそらす活動に従事している。調査が過度に理論乖離的なのは、理論家の過失の結果だけでなく、サーベイメソッドに過度に依拠し変量解析と統計技法に過度に関心を払っていることの帰結でもある。その上、理論家が調査者でもあるべき、調査者が理論家でもあるべきという期待は、他の成功を取めている科学において顕著な分業を曖昧にする。上記の趨勢の帰結は、実践家は引き出すべき理論的原理群をもてないことである。社会学は、a broad array of methodologies を用いる理論に志向した調査者によって系統的に検証されてきている理論的原理を用いる工学翼を開発する必要がある。このようにしてのみ、社会学的実践は社会学の中心に移ることができる。この転換が起こるまでは、社会学の中での実践の位置は周縁にとどまり、社会学は社会科学のエキスパートを必要としている政策形成者とクライアントに無関係なものと思なされ続けることであろう。

##### 4.1 序論：社会学に何が起きているか

20世紀半ばには、社会学は社会的宇宙の運力力学に科学的説明を提供することによって、科学のテーブルについたかのように思えた。これらの説明を与えることによって、社会学理論は人々の生活を形作る決定を行う政策形成者に情報を与えることができ、社会学的実践に携わる者に指針を与えることができるはずであった。今日では、社会学が数多くの誤った線に沿って分裂しているので、この潜在能力は枯渇したように思われる。

- (1) 第一の線は、検証可能な理論を開発することに失敗した社会学理論を貫いている。実に多くの社会学の理論化が哲学の雲の中に浮遊するか、古典学者の英雄崇拜者となるか、ある好ましくない社会状態のイデオロギーを積載した批判者になっている。社会学理論は社会界がどのように作動しているかを説明すること以外のあらゆることをしているように見える。
- (2) 第二の線は、理論を検証する見込みがあるとはほとんど思えない方法論が跋扈し、理論が記述的調査知見をごまかす形ばかりの陳列棚になっている、調査の非理論的性質である。
- (3) 第三の線は、社会運動の動きが広範な社会から大学のシステム、専門的学問、ファカ

ルティ政治に向かい、それはしばしばイデオロギー的にチャージされるバイアスにあえて疑問を呈する学者を詰問する警察官による恐怖支配を創り出している。その結果、社会学は今や説明ツールとして一般理論を持たない、現行のイデオロギー正統派を疑問視するいかなる思想にも疑惑のまなざしを向け、その教員、院生に政治、イデオロギーのリトマス試験を課す、高度に政争の具化した学問 a highly politicized discipline となっている。

(4) 第四の線は、社会学の断片化の他の点を強調する。つまり、社会学は決して自然科学になり得ないと主張する認識論的否定主義である。この帰結は、科学のツールで何かを説明する義務を持たず、理論と調査は必要不可欠な精神的規律を欠くことである。その代わり、状態は道徳的退廃の奨励を通じての悪魔と定義される。変数は中身の有意と反対の統計的有意への関心を以て相関づけられる。理論は社会界がどのように作動しているかを説明することを避け続けている。

私にとって驚きなのは、大半の社会学者がこれらの誤った線を社会学にとって問題と見なしていないことである。社会学は私が職業的社会学者になって40年間我々社会学の使命と感じているもの——人々を助け社会内の問題状態を改善するために社会学を使う——を無視しながら、科学のテーブルからはじき出されているように見える。社会的宇宙は性質上社会学的な問題で満ちている。問題を解決するパワーを備えた者の目から見ると、社会学は、社会科学に最もレリバントでない社会組織の研究に邁進している。

オーギュスト・コントは嘲笑はされなくとも無視されている人物であるが、社会学にとって最良の路を敷いた人物である。つまり、基本的な社会過程に関する理論を開発し、様々な方法を通じてこれらの理論を査定し、最も重要なことには、社会を再建するためにこの理論を使用した。社会学の多くの者にとっては、コントのこれは科学主義の最悪のものであった。つまり社会界の基本特性、ゲネリックな（時空を超えて普遍的な）特性が何ら存在しないから、誤った認識論、間違った存在論に素朴に泣きついているものだと。上記の冷淡のすべては、社会学がいかに両極化し、政争の具化しているかの証拠である。また我々がすべての科学が追求するもの（宇宙がどのように作動しているかについての知識）の追求を放棄するときに知識人としていかに落胆するかの証拠である。

本稿では、社会学の理論化、調査の基本的問題点を洗い出し、これらの問題を克服することによって、初めて、社会学実践において利用できる累積的知識群というコントの夢を実現できる。理論家が社会学実践に従事する者に指針となる、尤もらしい理論原理の知識基礎を建設するように、理論を行い、調査者がその理論を検証するときに初めて、社会学実践の周辺的位置は克服される。

#### 4.2 累積的科学が社会的実践に何をもたらすことができるか

社会的実践がどのように起こるかに関していくつかのモデルが存在する (Fein 2001)。

- (1) 道徳的 / 規範的モデル (奨励と制裁)
- (2) 臨床的 / 教育的モデル (無知を知らせて教育する)
- (3) 文化的 / 構造的モデル (プレイヤーを外部の力によって押し出されているものと見る)
- (4) コンサルタントモデル (専門化した才能が要求され、懇請される)

私はこれに五番目の工学モデルを追加する。

それは一般理論が基礎的社会過程に関する親指ルールに変換され、実践家によってクライアントのニーズに合うように適用される。このモデルでは、道徳的 / 規範的モデルを拒絶する。他の3つのモデルは工学的メンタリティを持つ社会的実践を包摂する。かくして、私が提案している工学モデルは一般理論に工学的解決を要求する問題をもたらす形で実践家の直感と経験を水路づける一方で、他のモデルに理論的歯を植え付けるものである。

まず、工学、特に社会工学は好ましくないという考えから脱却しよう。工学は帰納的かつ演繹的なものであるが、そのゴールは具体的問題に一般原理を適用することであり、途中のプロセスで、何かを組み立て、何かを据え、何かを引きはがし、何かを組み立て直す。工学は典型的には人間のニーズに応えるように行われる。社会工学は同じ目標を持ち、次の4つのものをめぐって回転する。

- (1) 高度に抽象的な理論的原理群
- (2) これらの原理が正しいことを示唆するテスト
- (3) 理論的原理を具体的に適用する経験の累積
- (4) 理論的原理を実践家が引き出すことができる親指ルールに変換すること

上記の4つの活動が制度化され統合されるときに、社会工学はもっと効果的となりうる。

私の目標は一般理論的原理からひきだされる一連の親指ルールを開陳することである。親指ルールを精密化することで、道徳家は直接の実践の奨励の他に何かを持つであろう。教育者は教えるものを持つであろう。文化的 / 構造的アプローチは行為者にどんな力がかけられており、何がなしえ何がなしえないかを照射することによって、何か説明力をもつであろう。コンサルタントは具体的な問題に関わりを持つより広範な才能のレパトリーを持つであろう。

「原理」「親指ルール」によって何を意味するのか。理論的原理は人間が振るまい、交流し、組織するときに働くゲネリックな社会的諸力と過程に関するものであるべきである。これらの諸原理はもっと単純な親指ルールに煮詰められ、社会的実践家によって参照されるために索引化されうると信じている。理想ではこれらの諸原理が学習され、理論的原理のマニュアルの中で参照されうる、社会的実践の大学院プログラムに可視化するであろう。私は長

生きできたら、『社会学的実践の諸原理』をいつの日か書きたいと思っている。

目標は、社会組織の問題を孕んだパタンに直面するクライアントにカウンセルと助言を与えることである。実践家の経験と直感とは実践家が経験事例を当該の親指ルールと結びつけることを可能にする。これは親指ルールの知識と工学の才能を要求する社会状況の個別性についての知識を伴う一種の民間演繹 *folk deduction*\* である。直感とは社会工学問題の解決を定式化する最良のやり方ではないが、経験的問題と工学的親指ルールを結びつける最良のやり方である。一部の理論サークルでは、抽象的法則から経験的事例への演繹に関するあまりに多すぎる強調が見られる。実際には、我々はほとんど常に経験的事例を見定め、この事例を理解するのにどの理論が適切かを直感的に識別する民間演繹 *folk deduction* を行っている。かくして、臨床家と教育者の役割は私のアプローチでは喪失されず、状況に精通しているものだけがどの理論的原理がレリバントであるかを呼び出すことができるので、むしろ中心的なものである。

\* ある理論的原理が直感的にある経験的データ群の解釈に適切であるように見えること (1994: 43)

社会学的実践家が道徳的アジェンダを持つならば、この社会工学はクライアントに道徳的奨励に従わせるのでなく、価値あるクライアントに才能 *expertise* を与えることを許す。最悪の状況は、イデオログが道徳的には好ましいが役に立たずひょっとしたら有害な解決を示唆する情熱に動かされることである。例えば、私のかつての同僚に、企業が労働者が不平を持ち組合を結成しようとした場合、低賃金と仕事を外注するぞという脅しとどのように組み合わせるか（大半の移民労働者は低賃金を受け入れることを余儀なくされた）非常に興味深い仕事をしているものがいた。このリサーチは重要であるが、結局この基本的な結論は、資本主義は打倒される必要があるというものであった。基底にあるイデオロギーが一編のリサーチの結論に現れると、クレディビリティが侵される。アカデミックなマルキストの間を除いてそれはきっと共鳴する指摘ではないだろう。

工学精神はイデオロギーを規制し、問題を実際に解決するための実際の提案でなく社会工学が誰を助けるであろうかを選抜する過程にそれを限定する。イデオロギーは人々を盲目にし、複雑な問題に非現実的な解答を提案させる。実際、たいていの場合解答は決して完全なものではない。なぜなら社会的実在は諸力の交錯プラス意図せざる結果をみせるので。だが工学アプローチはクライアントにオプションの範囲に関して情報を与える。これらのオプションが問題を解決するのはまれであろう。たいていの場合、期待できる最良のものはクライアントが直面する問題を緩和することである。

たくさんリサーチと理論化にかけられてきている社会的世界の一特性（連帯）に焦点を

当てることによって、私が念頭に置いていることを例証させてもらう。社会工学士が直面するかなり多くの問題は、低い士気、欠勤、労働者の疎外、その他の連帯の欠如を指す他の名称に関心を持つクライアントによって表明されている連帯の問題をめぐるものである。最初の段階では、社会工学士はこれらの名称が何を意味するか知るために状況を査定する。状況を現場で把握するには直感が重要である。次のステップは、クライアントの問題をレリバンタな理論的原理に合致させることである。実践家は連帯についての親指ルールに接近する。私は例証として、これらの一部だけリストした（表1参照\*）。次のステップは、連帯についてのレリバンタな親指ルールの中の力を指す概念の経験的な価値を確定するために、経験的状况を査定することである。ある意味で、このステップは状況の直感的な把握しか存在しない場合、尺度が存在するために仮説を定式化し検証するのと非常に良く似ている。これらのデータは、現在の状況に導いた親指ルールにおける概念の価値を確定する。次に、原理は原理の中の価値を高めたり減じることによって、状況をどのように変化させるかを示唆するはずである。この接点では、実践家は効果的な社会工学の中心的な障害に出会う見込みが高い。状況の構造と文化を所与として、親指ルールを変革の実施に利用することは可能でないであろう。それゆえ、社会工学は、理論的原理と現場の条件が何がなされうるかに実際の制約を課すことを認識しなければならない。それはイデオログや道徳の説教師は見たり信じたがらないものである。ひとつの考案された事例を用いて、上の議論にいくつかの架空の肉付けを施させてもらう。

\*訳注 表1の内容は3.5連帯の「あるセッティングにある諸個人の連帯感は次の時に増大する」の7項目と同じため、記載を省略する。

ある問題を孕んだ状況の組織構造と文化が権威の不均等を減じることができず、仕事の性質上濃密なネットワークを増やすことができないとしよう。上記の二つの条件が変更できないならば、できることには明白な限界がある。あるイデオログは人間の尊厳に背くものだから不平等は除去されねばならないと主張するかも知れない。しかしこれが状況のオプションでないならば、そのようなイデオロギーの勧告は何になるのか。たとえ不平等が除去できないとしても、原理は何がなされうるかに関していくつかの指針を与える。相互行為の率を高めるために、労働者を共通のシンボルに向けさせる儀式的機会を創り出すために、共通のシンボルを開発し、定期的に集会を開く。またイデオログは、そのような政策は労働者に虚偽意識を持たせるだけだと難癖をつけるだろうが、またしてもこの種の勧告が我々をどこにどこに運ぶというのか。それは資本主義システムを突っついていることを知ることがイデオログの中に快適な感覚を生成するかも知れないが、他に何の効果も持たないであろう。

工学的精神はこの種のイデオロギーを背景に押しやり、厄介ではあるが真の問題に取り組むオプションを求める。上記の限られたオプションを実行することは連帯の少しばかりの増大を引き起こす見込みがある。社会工学はまた権威の不均等の減少、構造的に等価な労働者間のネットワーク濃度の増大、連帯を生成する相互行為の率の増大のような、構造のラデカルな変更を示唆することができる。これらの示唆は、それらを実行に移すことが可能な場合には、おそらくはるかに連帯を高めるであろう。かくして、ここでの鍵は、クライアントにオプションを提示するまで単純化された親指ルールに煮詰められた理論的原理を使用することである。

ネガティブな感情の喚起に関するもっと複雑な原理を引き合いに出したもう一つの事例を取り上げることにしよう。これは、私がこの10年仕事をしてきている領域で、自分自身や他者の感情の理論化から引き出した親指ルールだけを提供できる(表2参照)。またも表2の親指ルールはほんの例証であって、リストを完全なものにするためにあと数十のものを追加することができる\*。今、一人の社会工学士が、諸個人が立腹し、不満を持ち、疎外され、一生懸命働きたいと思わない職場に入ることを想像したまえ。表1、2の親指ルールがレリバントで、ここでは状況の力学への社会工学士の直感と洞察が、連帯と感情に関する二組の原理のどの要素がレリバントであるかを決めるのに重要となる。親指ルール自体はここでは決定的なものとはなり得ない。これらの原理か他の原理が状況にレリバントであるかどうかコールをしなければならないのは社会工学士である。

\*感情についてのより完全な理論は拙著(2007)参照。

社会工学士は職場、メゾレベルの組織単位の風土と構造を査定することによってのみ、確定をすることができる。例えば、職場が厳格な権威のハイラーキー、仕事のフローの密な監督、労働者のモチベーションに関する不信の風土を見せるならば、労働者がネガティブなサンクションを味わい、彼らの期待や彼らの監督者の期待に応えない見込みが高い。上記の条件下では、彼らは恥を味わい、多くの場合、監督者、経営者、風土、メゾ構造などの外部に責任をなすりつける。もし彼らが上記の条件下で長期にわたって、働くことを余儀なくされるならば、彼らは彼らのネガティブな感情的をマクロな水準の経済に向けるであろう。もし彼らの自我(self)が高度に傑出しているなら、彼らは強い恥の感情を味わうであろう。彼らはまたこの恥を抑圧し、外部の責任に転嫁し、職場のすべての側面に怒りと疎外を表明する傾向がある。もし構造的に彼らが等価な労働者と相互行為することができるなら、彼らはメゾ水準の組織単位の構造と風土に対する団体の敵意とそれからの疎外をポジティブなサンクションで強化する職場の風土を育むであろう。

表2 ネガティブな感情喚起の条件

1. 感情は次の二つの基本的条件下で引き起こされる。
  - (a) ポジティブないしネガティブな裁可
  - (b) ある状況で期待が適わないし適わない
2. 諸個人がポジティブな裁可を体験する（ないし期待が適う）時、彼らはポジティブな感情を体験する。その状況で、アイデンティティと自画像が傑出しているほど、ポジティブな感情はますます強くなる。
3. 諸個人が、ネガティブな裁可を体験する（ないし期待が適わない）時、彼らはネガティブな感情を体験する。その状況で、アイデンティティと自画像が傑出しているほど、ネガティブな感情はますます強くなる。諸個人が恥を感じる傾向が強くなる。その状況を道徳的タームで定義すると、罪の意識が強くなる。
4. 諸個人が彼らのネガティブな感情に対する帰属次第で、ネガティブな感情は様々に分かれる。帰属のターゲットとなる可能性のあるのは次の5つ。自己、他者、ローカルな状況、メゾ構造、マクロ構造。
  - (a) もし彼らがネガティブな裁可の受容（ないし期待が適わないこと）で自分を責めるなら、彼らは恥を感じるであろう。その状況を道徳的タームで定義すると、罪の意識を感じるであろう。
  - (b) もし彼らがネガティブな裁可の受容（ないし期待が適わないこと）で他者を責めるなら、彼らは他者に対する怒りを感じ、表明するであろう。
  - (c) もし彼らがネガティブな裁可の受容（ないし期待が適わないこと）でメゾ水準の他者範疇を責めるなら、彼らはこれらの範疇の他者に怒りを表明し、偏見を抱くであろう。
  - (d) もし彼らがネガティブな裁可の受容（ないし期待が適わないこと）でメゾ水準の団体を責めるなら、彼らはこの団体の構造と風土に怒りを感じ表明するだろう。この怒りが慢性的ならば、彼らはこの団体の構造と風土から疎外されるであろう。彼らが構造的に対等な地位にいるものと交流する他者もこの感情を味わい、この団体の構造と風土に対する彼らの連帯を通じて、ポジティブな感情の喚起を獲得するであろう。
  - (e) もし彼らがこのメゾ構造が埋め込まれているマクロ構造を責めるなら、彼らはマクロな構造（経済、宗教、政治等）に怒りを感じ、表明するだろう。彼らはこのマクロ構造の正当性を撤回するだろう。
5. 個人がネガティブな裁可を体験する（ないし期待が適わない）状況で、自己が傑出するなら、彼らは恥を感じるであろうし、道徳的に定義するなら罪の意識を感じるであろう。彼らが恥を感じるほど、彼らはこれを抑圧し、他者、状況、他者の範疇、メゾ構造、マクロ構造にその怒り転嫁する傾向がある。
6. ネガティブな裁可と期待が適わないことが慢性的で個人がその状況を離れることができないなら、彼らは役割から距離を置いたり、疎外を通じて、また他者や構造に怒りの責任を転嫁することで、自己の傑出性を下げようとする。

社会工学士はこの種の問題を容易に解決することはできない。なぜなら、それは慢性的なもので怒りや疎外の中に抑圧されたり変質される恥のような有力な感情の周りを回転するから。しかし、表1と2は、成績にポジティブサンクションを行使したり、労働者と監督者の交流と相談の比率を高めたり、反経営者の下位文化のリーダーを解雇したり、逆に彼らを監督責任者に選抜するなどを含むオプションの輪郭を描く指針を与えることができる。鍵は、ハイラーキカルで懲罰的な監督によって諸個人の恥の感情を減じ、物質的、シンボリックに報酬が与えられる成績とアイデンティティを結びつけることである。これらのオプションが採用される保証はないし、しかし少なくとも示唆された解決策はイデオロギーと反対の理論にいくらかの基盤を持つ。

上記の簡単な例証は、理論を社会学的実践に運ぶ戦略の確定的なものでなく、単なる例示に過ぎない。親指ルールは実践家に容易に参照できるようにもっと網羅的でクロス索引化されねばならないだろう。しかし、この戦略は次の二つの理由で実施に移すことができる。第一に、社会学における理論化の幾分憂鬱な状態にもかかわらず、ゲネリックな社会過程の法則は理論文献、調査文献に見いだされる。実際、社会学者はわたしが PhD を受け、専門の社会学者として経歴を開始した 40 年前よりは社会的宇宙のなかのゲネリックな諸力に関して、社会学がどれだけ多く知っているか認識していない。これらの理論は実践者のために、要約され、統合され、親指ルールに変換されうる。第二に、社会学実践の既存のアプローチはイデオロギー的モデル、道徳的非難モデルを除いて、この工学的アプローチに適用されうる。というのは、実践に従事する者の持つスキルそのものが状況と親指ルールとを関連づけるのに重要なものであるから。私のアプローチの最も厄介な部分は、親指ルールを収集し、これらの原理が彼らの努力に役立つことを実践家に納得させることである。私が以下で探求する他の障害も存在する。

#### 4.3 前に立ちはだかる障害

最大の障害は、社会学は人間行動、相互行為、組織についての何の法則も持っていないと社会学者の多くが抱いている信念であるが、我々は一般に認識されているよりもはるかに科学として成熟している。社会学者が社会学の発展の十全な承認を妨げている障害は、理論的リサーチプログラムの人為的区割りと理論家が様々な系譜と概念命題がどの程度重複するか認識しようとしめないことである。関連する障害は、社会学が科学たり得ないという自虐的シニシズムと社会学の営みは何らかの道徳原理の名の下に甲高い道徳布教とアクションの喚起であるべきというものである。皮肉にもこのシニシズムは社会理論家の間に最も大きく、それが科学的に理論化する努力の欠如を正当化している。イデオロギーのバリケードを呼びかけたり、科学的社会学を認識論的幻想と糾弾したり、聖典化された古典的聖人のテキスト分析に従事することの方がかなり容易である。

科学的社会学を抱くのを躊躇したり、科学理論に基づいた社会工学に何も言わないことのほかに、社会工学を成功させるのにさらなる障害がある。ひとつは、クライアントが何が必要かめったに見解を持っていないこと、ないしは執拗な問題を除去するために状況の構造と風土を変えることを躊躇することである。必要な変革の費用は社会学の工学士をクライアントを説得する役割に付させるが、それは必ずしもたやすいものではない。かくして、問題の正しい診断と問題を緩和できる当該の理論的原理の理解が存在しても、クライアントを進ませることはしばしば困難である。クライアントの説得は工学的解決の実施よりも

困難であろう。

もう一つの障害は、社会的実在の複雑さである。社会的諸力はしばしば交錯し時としてお互いの効果を加速させたり、逆に相殺したり、また軌跡を変更したり、たくさんの親指ルールを用いるのを必要としたりする。いずれにせよ、工学的介入の帰結がどんなものになるか正確に予測することは困難であろう。自生システムの中で仕事をしている社会学者は天気を予報する気象学者に非常に似ている。関与する諸力は知られているが、その完全な強さと交互効果はしばしば正確な予測を困難にする。例えば、権力と権威の不均等な分布を生成する諸力はしばしば予測しがたい仕方で連帯を生成する諸力と交錯する。そこで社会工学士はこれらの交錯を抽出するために直感を用いねばならないが、同時にこれはクライアントにあまりおおくのものを約束しないことになる。コントロールされた条件よりも自生システムの中で仕事をするときすべての科学は、諸力の交錯と交互効果に直面するが、宇宙のこの事実を克服できない障害を提示する者と見なすのが一般的な社会学者である。理論的知識を複雑な経験的事例に適用する多くの学者のようにモデル化とシミュレーションは他の工学系科学におけるように、重要なツールとなるはずである。

#### 4.4 結論

科学理論の工学的適用を提唱する私の目標は、社会学を象牙の塔の外で役立てることにある。公共社会学の近年の呼びかけは、私が輪郭を語ってきた社会学の抱える問題を解決するものではない。むしろ4つの社会学の幸せな和解は、社会学を分断する現実の違いを隠蔽する疑わしい類型である。4つの社会学、いやもっと多くの社会学が存在するだろうが、それらはお互いの極端をほとんど正すことはない。社会学者が大きな公共問題にコメントすることを求められることがめったにない理由は、我々が科学としてたいして尊敬されていないからである。もし科学的社会学がクライアントが問題に取り組むのを助ける長い歴史を持ってきたならば、それはもっと尊敬されてきたことだろう。その結果、社会学者は信頼を集めて公けの討議の舞台に参入しているだろう。イデオロギーの極のひとつから公の討議の舞台に参入する社会学者は尊敬を集めるどころか不信を買うであろう。社会学者は公的言説の争点を診断し、科学者として関心を寄せ、この診断に基づき理論的原理を用いながら改良の有益な提案をすべきである。社会学者は *talking heads* のランクに加わる必要はなく、その代わり、公の討議のテーブルに社会学のユニークな視点をもたらすべきである。社会学の実践に利する社会学内の社会学翼というものがもしあるならば、社会学者は有用な知識を保有するとみなされるので、社会学者は公的な人物として知られるようになるだろう。

社会的宇宙の法則を開発しその再建にそれを利用しようとしたオーギュスト・コントのピ

ジョンは依然として正しいものであると私は思っている。法則と法則がそれから組み立てられるハード科学が存在しなければ、社会学は科学たり得ないだろうし、科学をイデオロギーに置き換えてしまいたがるであろう。実践に理論を使用することはもっと学問らしくなるひとつの術を社会学に与える。ある意味で、理論によって示唆されたアクションコースを実行することは理論の実世界でのテストである。社会学の実践が問題条件に介入するツールを手に入れる一方で、理論はその工学的応用から大いに恩恵を受けるであろう。

多くの社会学者は世界を何とか変えたいと望んで社会学に入ってきた。私の考えでは、社会工学は我々の大半を学部生として社会学に引き込んだ理想主義的目標を実現する最良の方法である。今日の世界が直面するほとんどすべての問題が性質上社会的である。だが、これらの問題に何をするかに関する公共言説を支配しているのは経済学者、他の社会学者、歴史家である。社会学は実世界の問題に決して不適切でなく、理論に精通した社会工学士は社会学を社会的宇宙のリメイクに害を与えるのではなく善をなすようにする。学生や我々自身にイデオロギーを叫ぶのは、何かをポジティブにする我々の無能と無力をさらけ出すだけである。イデオロギー的糾弾と道徳の感化に比較して、理論とそれを裏付けるデータを収集することははるかに厄介であり、それらを統合し、フィールドで実践家によって利用される親指ルールに変換することはもっと厄介である。しかしながら、この種の厄介な知的な労働は、メディアでもうひとつの *talking head* を生み出すよりも、もっと大きなペイオフをもたらすであろう。

しかしながら、ある面で社会学者がこの地点で公共領域に飛び込むべきかどうか確信が持てない。我々の集合的レジユメ上に工学の成果を記録することの方が賢明かも知れない。これらの成果はいつか一人のクライアントの手元に届き、次第に社会学に対する信頼と評判が高まることであろう。その上、私の提案は社会学的実践の様々な形態（応用社会学、臨床社会学）が社会学の目下いる周縁ではなく中心に位置づけるものである。科学的社会学の開発の理由は、純粋に学問的なものでなく、科学はものを建設するために利用されるべきことにある。理論家が理論をつくり、調査者が完全な方法論のパレットを使って理論をテストすることに彼らの努力をもっと費やすならば、理論家が社会学的実践の有用なルールのハンドブックを開発するために実践家、工学士と協力するならば、そして実践家がクライアントに助言するためにこれらのルールを使用するならば、社会学はこの努力のためにもっと良好になるだろうし社会も良好になるだろう。おそらく我々が社会学的実践を社会工学と呼称することを望まなければ、これらの活動はイデオロギーの情熱ではなく、工学士の社会学を呼称しなければならない。

文献一覧

社会学の一般理論, グランド理論, 知識の累積化関係

- Maryanski, A./J.H. Turner 1992 *The Social Cage: Human Nature and the Evolution of Society*. Stanford, CA : Stanford Univ. Press.
- Turner, J.H. 1972 *Patterns of Social Organizations. A Survey of Social Institutions*. New York : McGraw-Hill.
- 1983 “Theoretical Strategies of Linking Micro and Macro Processes. An Evaluation of Seven Approach.” *Western Sociological Review* 14(1) : 4-16.
- 1984 *Societal Stratification: A Theoretical Analysis*. New York : Columbia Univ. Press
- 1987 “Toward a Sociological Theory of Motivation.” *American Sociological Review* 52 : 15-25.
- 1987 “Analytical Theorizing.” in : Anthony Giddens/J.H. Turner (eds.) *Social Theory Today*. Polity Press, pp. 156-194.
- 1988 *A Theory of Social Interaction*. Stanford Univ. Press.
- 1989 “Can Sociology Be a Cumulative Science ?” in : J.H. Turner (ed.) *Theory Building in Sociology : Asuming Theoretical Cumulation*. Newbury Park : Sage Pub. pp. 8-18.
- 1991 “Developing Cumulative and Practical Knowledge through Metatheorizing.” *Sociological Perspectives*. 34 : 249-68.
- 1995 *Macrodynamics: Toward a Theory on the Organization of Human Populations*. New Brunswick, NJ : Rutgers Univ. Press for Rose Monograph.
- 1997 *The Institutional Order*. London : Longman.
- 1999 “Toward a General Sociological Theory of Emotion.” *Journal for the Theory of Social Behavior* 29 : 133-162.
- 2000 *On the Origins of Human Emotions*. Stanford, CA : Stanford Univ. Press.
- 2000a “A Theory of Embedded Encounters.” *Advances in Group Processes* 17 : 285-322.
- 2002 *Face-to-Face: Toward a Sociological Theory of Interpersonal Behavior*. Stanford, CA : Stanford Univ. Press.
- 2003 *Human Institutions : A Theory of Societal Evolution*. Boulder, CO : Rawman & Littlefield.
- 2009 *Human Evolution : A Sociological Theory*. London : Routledge.
- Turner, J.H./ D.E. Boyns 2001 “The Return of Grand Theory.” in : J.H. Turner (ed.) *Handbook of Sociological Theory*. Kluwer Academic/Plenum Publishers. pp. 353-378.
- Turner, J.H./J.E. Stets 2005 *The Sociology of Emotions*. Cambridge University Press.

アメリカ社会の社会問題関係

- Aguirre, A.Jr./J.H. Turner 1995 *American Ethnicity: The Dynamics and Consequences of Discrimination*. McGraw-Hill.
- Turner, J.H. 1972 *American Society: Problems of Structure*. New York : Harper and Row.
- 1977 *Social Problems in America*. New York : Harper and Row.
- Turner, J.H./C. Starnes 1976 *Inequality: Privilege and Poverty in America*. Santa Monica, CA : Goodyear Publishing.
- Turner, J.H./D. Musick 1985 *American Dilemmas. A Sociological Interpretation of Enduring Social Issues*. New York : Columbia Univ. Press.

学説, 理論パラダイム関係

- Turner, J.H. 1973 “From Utopia to Where? A Strategy for Reformulating the Dahrendorf Conflict Model.” *Social Forces* 52 : 236-44.
- 1974 *The Structure of Sociological Theory*. Homewood, Ill : The Dorsey Press.
- 1991 *The Structure of Sociological Theory*. 5th.ed. Homewood, Ill : The Dorsey Press.
- 2002 *The Structure of Sociological Theory*. 7th.ed. Belmont, CA : Wadsworth.
- Turner, J.H./ L.Beeghley 1974 “Current Folklore in the Criticisms of Parsonian Action Theory.” *Sociological Inquiry* 44 : 47-55.
- Turner, J.H./ A.Maryanski 1979 *Functionalism*. Menlo Park : Benjamin Cummings.
- Turner, J.H./L.Beeghley.1981 *The Emergence of Sociological Theory*. Homewood, Ill : The Dorsey Press.
- Turner, J.H./L. Beeghley/C.H.Powers. 2002 *The Emergence of Sociological Theory*. 5th.ed. Belmont, CA : Wadsworth.

アメリカ社会学の歴史関係

- Turner, S.P./J.H. Turner 1990 *The Impossible Science:An Institutional Analysis of American Sociology*. Newbury Park, CA : Sage Publications.
- Turner, J.H. 1989 “The Disintegration of American Sociology.” *Sociological Perspectives*. 32 : 419-433.
- 1994 “The Failure of Sociology to Institutionalize Cumulative Theorizing.” in J. Hage (eds.) *Formal Theory in Sociology : Opportunity or Pitfall*. Anbany, NY: Sunny Press. pp. 41-51.
- 2006 “American Sociology in Chaos : Differentiation without Integration.” *The American Sociologist* 39(2) : 15-29.
- Turner, J.H./ K-M. Kim 1999 “The Disintegration of Tribal Solidarity among American Sociologists:Implications for Knowledge Accumulation.” *The American Sociologist* 30 (2) : 5-20.

理論と調査と実践 (工学的応用) 関係

- Turner, J.H. 1998 “Must Sociological Theory and Practice Be So Far Apart?” *Sociological Perspectives*. 41 : 244-258.
- 2001 “Social Engineering : Is This Really As Bad As It Sounds?” *Sociological Practice: A Journal of Clinical and Applied Sociology*. 3(2) : 99-120.
- 2006 “Is Public Sociology Such a Good Idea?” *The American Sociologist* 36 : 27-45.
- 2008 “The Practice of Scientific Theorizing in Sociology and the Use of Scientific Theory in Sociological Practice.” *Sociological Focus* 41(4) : 281-299.